第Ⅳ章　分析と考察

鹿角市内の奈良・平安時代の竪穴住居

１．はじめに

⑴　歴史時代の遺構の発見と紹介

鹿角市内に所在する奈良・平安時代の遺跡が始めて紹介されたのは枯草坂古墳である。枯草坂古墳は明治34年12月、佐藤定吉氏によって発見され、大正元年には県史編纂主任の長井行氏、大正８年には毛馬内出身で東洋学の権威である内藤湖南氏が現地踏査を行っている。この古墳の構造については大正２年、高橋建自氏が『考古学雑誌３巻８号』において発表し、「川原石積石の円墳であること、伴出遺物から奈良時代末から平安時代初頭のもの」と報告している。枯草坂古墳から出土した勾玉・ガラス玉などの遺物について国立東京上野博物館が保管しているほか、その後同地より出土したものについては秋田県立博物館、鹿角市教育委員会がそれぞれ保管し、県・市指定文化財となっている。

市内において初めて奈良・平安時代の竪穴住居跡が発掘調査されたのは菩提野遺跡である。この遺跡は、昭和26年・27年の両年にわたり文化財保護委員会（現　文化庁）が行った「大湯町環状列石」の発掘調査（いわゆる国営調査）の一環として実施したもので、その目的は「環状列石の構築時期解明」であった。大湯環状列石については文化財保護委員会刊行の『大湯町環状列石』や鹿角市教育委員会が昭和59年度（第１次調査）から平成15年度（第20次調査）にかけて行った発掘調査をまとめた『特別史跡　大湯環状列石（Ⅰ）』に詳しいが、菩提野遺跡の調査は「大湯町環状列石」の影に隠れ、あまり注目を浴びることはなかった。

同報告書によると、昭和21年、後藤守一氏・江坂輝弥氏が大湯町環状列石の調査をしている際に「竪穴跡群がある、土師器を出土する。その年代が奈良時代前後のものであるらしい」ことを見学者から聞き、国営調査時に実現させたものである。

この遺跡は木村善吉氏にすでに紹介されていたらしく、それによると12個の竪穴が群をなしていたということである。しかし、昭和21年時点で確認できたのは６個で、そのうちの第九号竪穴跡とした住居を国営調査時に精査している。当時、竪穴は現地形においても大きな窪みとして確認され、これを覆うように大湯浮石の堆積層が認められたと報告している。竪穴の形態は方形を呈し、南壁にカマドがつくられたものであることが判明、ここで初めて鹿角市内での奈良・平安時代の竪穴住居跡の構造が明らかにされた。

その後、鹿角市内の発掘で奈良・平安時代の住居跡の発見は昭年の「鳥野遺跡」や「源田平遺跡」の調査を待たなくてはならず、昭和54年以降の東北縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査やその他の開発事業・学校建設などによって爆発的に検出例を増していった。

これまでの調査によって当該時期の住居跡が確認された遺跡は４６遺跡にも及び、その検出棟数は443棟となった。

(2) 時代背景

奈良時代後半になると鹿角は、律令国家の発展と共にその支配下に置かれはじめ、その影響を受けた文化が伝播される。

その代表的なものが鹿角市八幡平字小豆沢地区に鎮座する「大日霊貴神社（大日堂）」に伝わる「大日堂舞楽」である。この大日堂は養老２年（714）に再建されたものといわれ、このとき都から出向いた楽人によって神楽が伝えられたといわれている。周辺地域４集落によって保存・伝承され昭和51年５月に「国指定重要無形民俗文化財」となっている。

また、時期が下り平安時代に及ぶと歴史書に鹿角（上津野と書き記される）の名が見え始める。

『日本後記』によると、811（弘仁２）年３月20日に、陸奥出羽安察使　文室綿麻呂は「爾薩體・幣伊」の討伐を計画し、爾薩體の餘薛60余人を殺害したとされている。この爾薩體は現在の岩手県二戸市仁左平付近と考えられ、餘薛とは残党という意味合いからすると餘薛殺害の地は米代川上流・安比川上流の範囲である鹿角を示すものと考えられる。

『日本三代実録』によると、878（元慶２）年３月15日、帰順した蝦夷が秋田城やその周辺で民家を襲撃したことに端を発した「元慶の乱」では、政府は秋田城平定を目的に小野春風を陸奥鎮守将軍として出兵させた。その途中「上津野村」に入り夷俘を説得し、その後秋田営に入り鎮静した。このときに利用された街道は「陸奥路」といわれており、その街道筋が安比川・米代川上流域にあたる。これが近世においては「鹿角街道」として、さらに現代に至っては「国道282号線」として整備されていったものと考えられる。

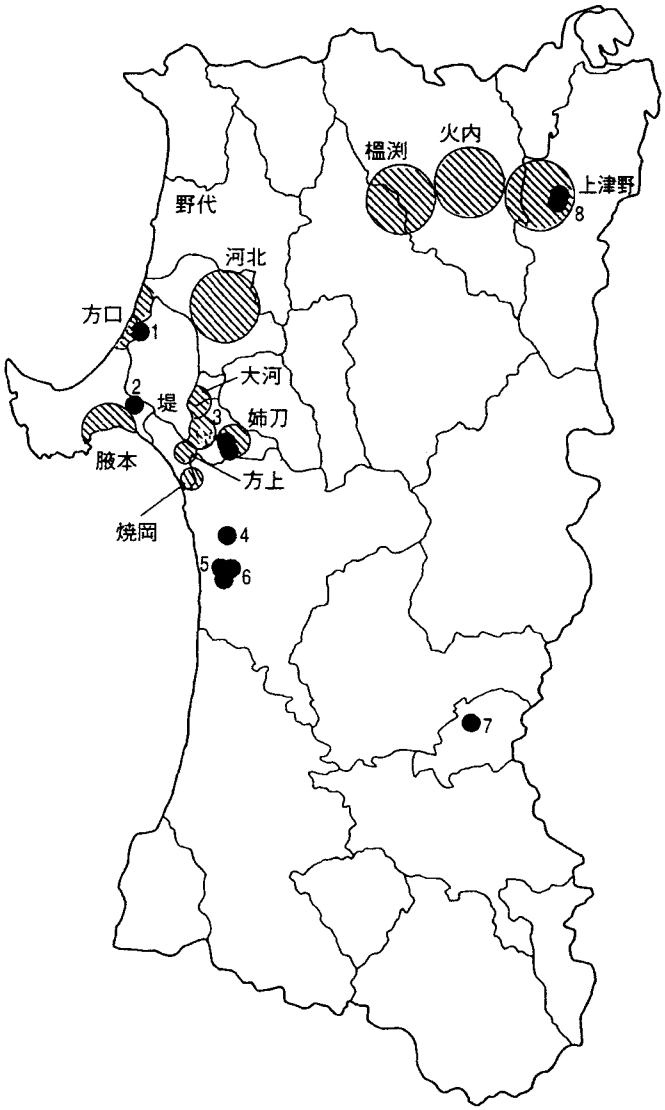
また、同年７月10日の条に「秋田城下賦地」の記載がある。火内・野代・河北（第31図）とともに「上津野」の地名も12カ村のうちの一村として書き記されている。さらに大湯環状列石がのる台地先端にある枯草坂古墳に隣接して「泉森」という地名が残されている。市史によると明治９年に「蝦夷森を泉森と改名」したという記載がある。

このように歴史書や地元に残された地名から奈良時代後半、鹿角は蝦夷の地でありながらも、律令文化の伝播や蕨手刀・石帯等の出土から律令体制に徐々に組み込まれていく過渡期とみることができる。

２．鹿角の自然環境

(1) 地　形

鹿角市は北東北のほぼ中央、日本海に注ぐ米代川上流域に位置し、北に国立公園十和田湖、南に八幡平を配し、自然に恵まれた地域である。



地名対照

上津野＝鹿角市
火　内＝大館市・比内町
榲　渕＝鷹巣町
河　北＝琴丘町・山本町
大　河＝八郎潟町
姉　刀＝五城目町
堤　　＝井川町
方　口＝若美町
腋　本＝男鹿市
方　上＝昭和町・天王町
焼　岡＝秋田市金足
※ 合併前の地名を使用

蕨手刀出土遺跡

1：えぞが台古墳……1本
2：脇本飯町　　……1本
3：岩野山古墳群……2本
4：久保台古墳　……2本
5：湯の沢 F-25 墓 …1本
6：小阿地古墳群……1本
7：石森(上中村) ……1本
8：物見坂Ⅰ遺跡……2本

※新野直吉『古代史上の秋田』に加筆

第31図　元慶の乱当時の蝦夷の村

鹿角盆地を貫流する米代川は奥羽山脈の一峰である四角岳に水源を発し、岩手県安代町田山地区を抜け、鹿角市八幡平地区に出る。ここで熊沢川を合流し、流れを北に向け、毛馬内地区で大湯川・小坂川を合流し、その流れをさらに西に向け、大館盆地へと向う。

盆地を一望するとこれら米代川、大湯川等の大きな河川とこれらの支流が「鹿の角」のように入り組みながら流れており、その様子が地名になったという説もある。これらの河川の浸食によりつくり出され、舌状台地は盆地東側の奥羽山脈の西裾に発達し、標高150m～180mを測る。大湯川左岸に形成された中通台地（通称　風張台地）には特別史跡大湯環状列石や四角岳

の西側裾野には市内でも大規模な歌内遺跡が所在する。

また、盆地西側は、森吉山を主嶺とする高森山地が縦横している。しかし大きな河川が存在しないためか舌状台地はほとんど存在せず、裾野先端に猫の額ほどの段丘地形が残されている程度である。標高は200m～150mを測り、段丘には縄文晩期の遺跡である「東在家遺跡」が所在する。

なお、鹿角市内の地形と地質については、本報告書第Ⅰ章２にその概要を記載している。

⑵ 気　候

『秋田県史』によると秋田県全体は、「ケッペン」の気候区分では亜寒帯に近い温帯多雨気候に属するといわれているが、ここ鹿角は亜寒帯の傾向が強いとされている。

資料的には古いが『秋田県気象65年報』によると最高平均気温は24度、最低平均気温は－3.1度である。雪は沿岸部より多く最深降雪量は150cmである。

しかし、平成18年から19年にかけての冬期は降雪も少なく、その量は平年の約７割程度で、しかも冬日となる日も少なく暖冬であった。

また、風向は『鹿角市史』の資料をみると冬季には南西寄り、春～秋期には西寄りの風が多く、年間を通して西風が多いことがわかる。平成15年・16年の観察資料（第２表）がこれを物語っている。年間を通じしかも夏場に東風（やませ）が多いときは農作物が不作（けがち）となるといわれている。

⑶ 遺跡を覆う堆積土

各遺跡を覆う堆積土は表土（第Ⅰ層）から地山までほぼ同じような堆積となっている。概ね第Ⅰ層：黒褐色土、第Ⅱ層：黄褐色火山灰層、第Ⅲ層：黒色土、第Ⅳ層：暗褐色土（地山までの漸位層）、第Ⅴ層：黄褐色土（基盤層）である。

黒色土中にサンドイッチ状に堆積する第Ⅱ層黄褐色火山灰層を『大湯町環状列石』では「大湯浮石層」と命名した。地質学的には「十和田ａ降下火山灰」と呼ばれるもので、その降下範囲は東北北部一円に及ぶが、特に八戸周辺に厚い堆積層を認めることができる。鹿角地域では、噴出源に近いほどこの堆積は厚く、離れるに従ってその堆積は薄くなる傾向にある。

なお、噴火年代はこれまでの発掘調査例から平安時代中頃・10世紀前半とされていたが、滋賀県比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、延喜15年７月（西暦915年）とも言われている。また、太田谷内館跡では、朝鮮半島・白頭山を噴火起源とする白頭山・苫小牧火山灰の堆積が十和田ａ降下火山灰の上にわずかに黒土を挟んで確認されている。

各報告書の文章・表中で平安時代前半・後半と示しているものが見られ、これは大湯浮石降下年を区分としたものと考えられる。

第３表　鹿角市の風向

◆平成 15 年

月 風向	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	割合%
東	2	1	3	3	2	5	10	6	4	3	1	1	41	11.2
南東	0	3	2	0	0	2	0	2	1	0	0	0	10	2.7
南	2	1	1	5	6	1	1	2	1	1	0	1	22	6.1
南西	3	4	2	4	4	5	1	4	2	1	4	3	37	10.1
西	14	8	11	6	9	4	3	6	9	13	13	14	110	30.1
北西	2	2	6	3	2	3	2	2	0	6	4	1	33	9.1
北	5	3	3	2	2	5	5	2	3	1	4	4	39	10.7
北東	0	1	3	3	2	4	6	0	3	0	0	3	25	6.8
無風	3	5	0	4	4	1	3	7	7	6	4	4	48	13.2
	31	28	31	30	31	30	31	31	30	31	30	31	365	100.0

※観測者及び観測地点：鹿角広域消防組合毛馬内分署

※観察時間：午前９時、午後１時観察。午前９時の風向きその日の代表的風向きとした。

◆平成 16 年

月 風向	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	割合%
東	2	0	1	2	2	2	0	4	5	1	2	0	21	5.7
南東	1	1	0	1	1	2	0	3	2	1	0	1	13	3.6
南	0	1	1	2	1	2	3	1	2	0	2	0	15	4.1
南西	3	5	4	4	4	4	3	8	2	1	3	2	43	11.8
西	16	13	15	16	11	9	9	8	7	8	14	15	140	38.3
北西	0	2	4	2	3	4	3	2	1	4	4	3	32	8.7
北	2	1	3	0	1	3	3	2	4	2	0	3	24	6.6
北東	0	1	1	2	3	1	3	0	3	4	1	1	20	5.5
無風	7	5	2	1	5	3	7	3	4	10	4	6	57	15.7
	31	29	31	30	31	30	31	31	30	30	30	31	365	100.0

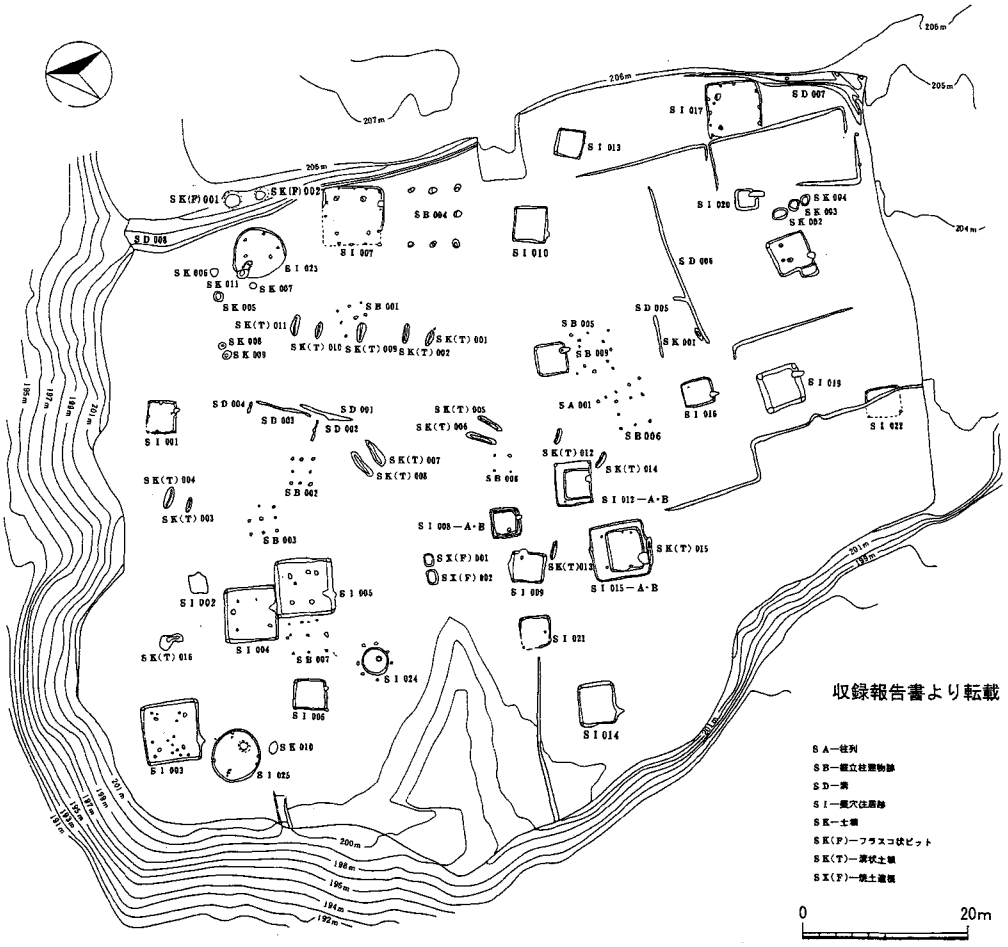
※観測者及び観測地点：鹿角広域消防組合毛馬内分署

※観察時間：午前９時、午後１時観察。午前９時の風向きその日の代表的風向きとした。

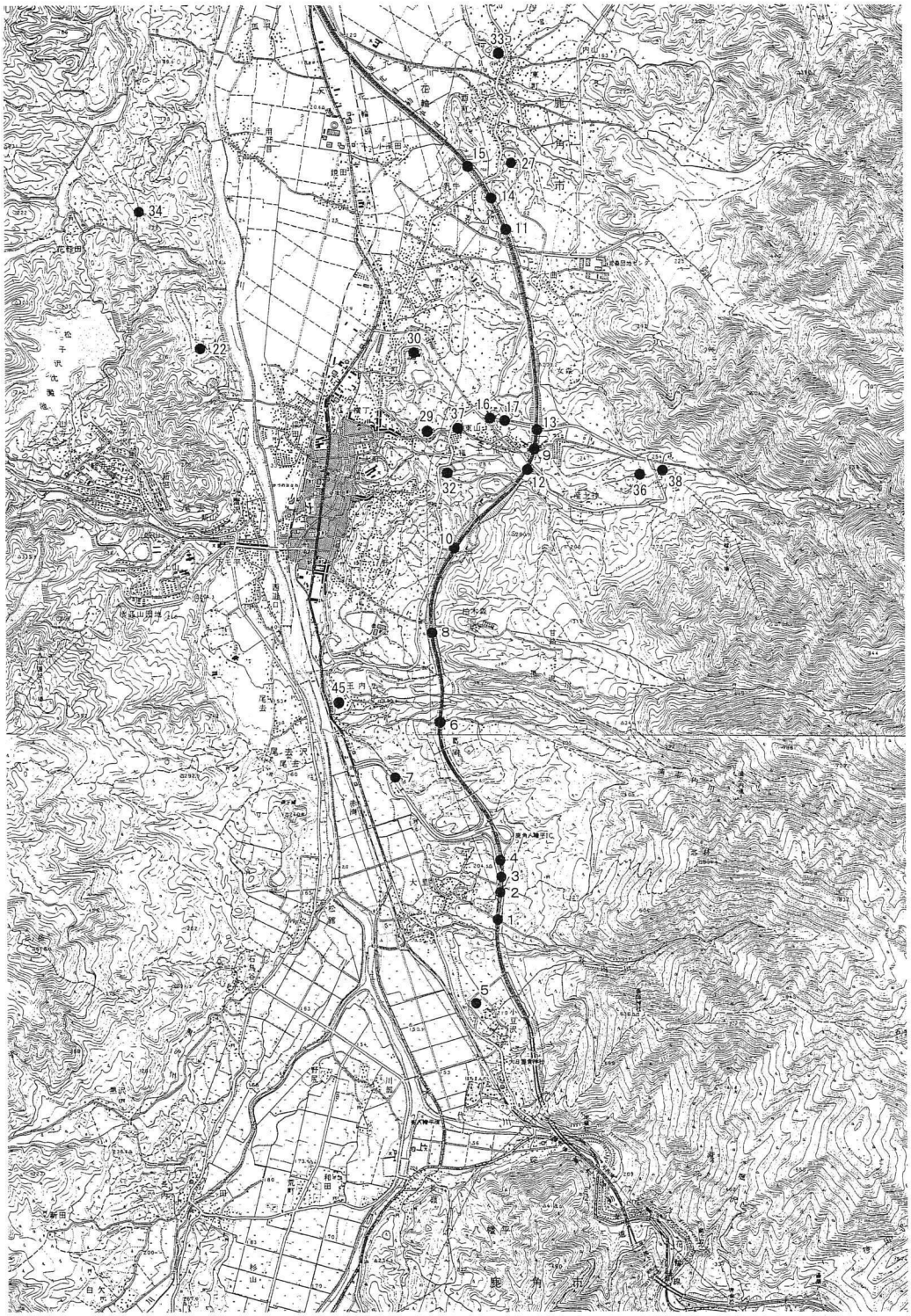
3．遺跡の立地と概要（第32～34図）

鹿角市内のいたるところには大小の河川の浸食を受けて形成された舌状台地・段丘が発達している。盆地東側、奥羽山脈の裾野には大きな舌状台地が、盆地西側には「猫の額」ほどの段丘が広がっている。遺跡はその台地・段丘の上に営まれている。

代表的な遺跡である「北ノ林Ⅰ遺跡」では、次のような立地と住居配置（第32図）となっている。遺跡の立地する台地は、奥羽山脈の一峰である四角岳の西側裾野に位置する。台地の南側には米代川の支流である歌内沢川、北側には無名の沢が「鹿の角」のように入り込んでいる。標高は200m～205mである。台地は台形状を呈し、南北100m×東西60m～80m、面積7,500㎡を測る。台地先端部から山際80m程のところに台地を区切る南北から入り込んだ沢（報告書では大溝と呼んでいる）が入り込んでいる。竪穴住居は台地中央から先端に、掘立柱建物跡は台地中央から大溝の間に多く分布している。



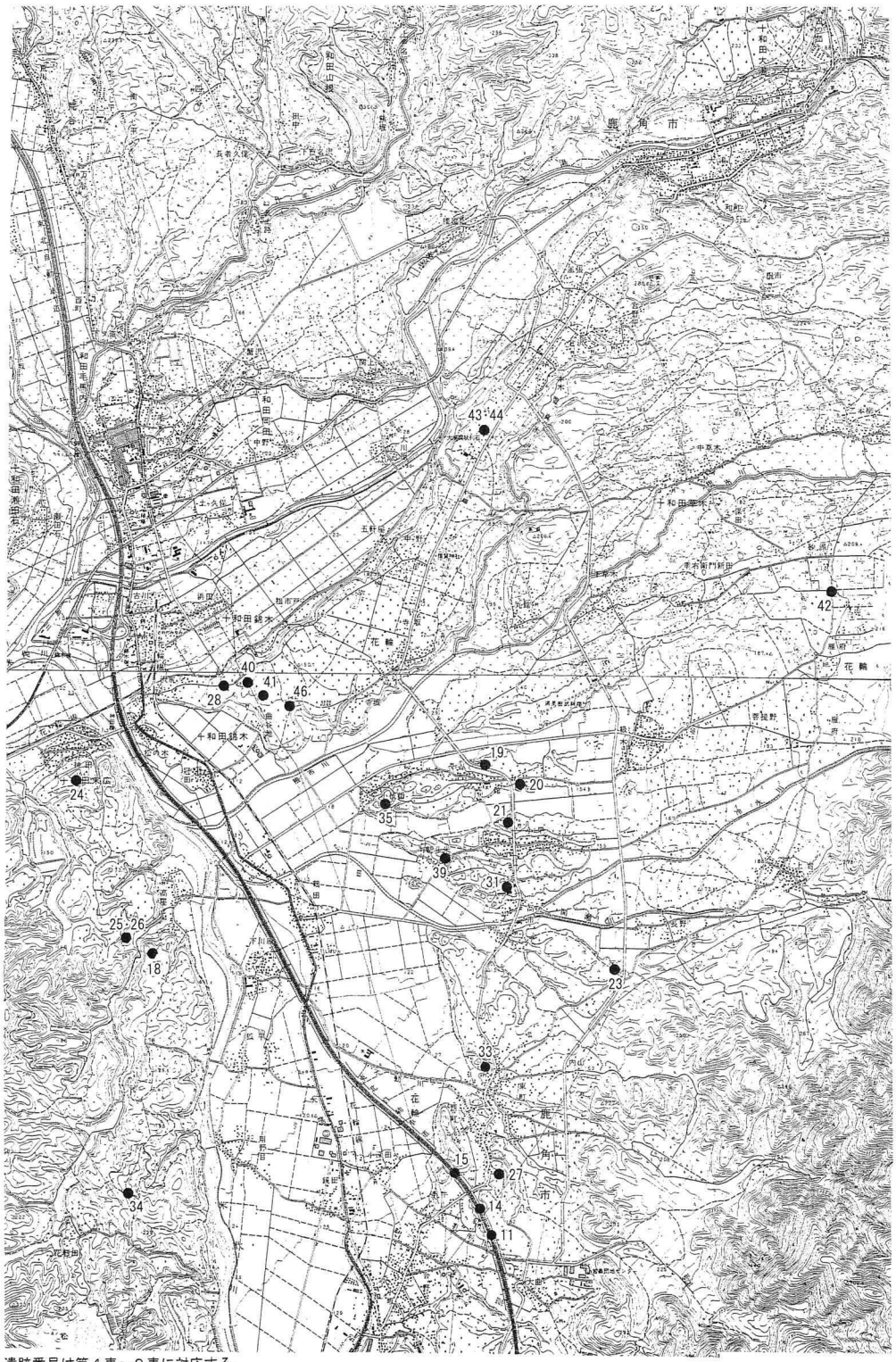
第32図　北ノ林Ⅰ遺跡



遺跡番号は第４表～９表に対応する。

0　1km

第33図　遺跡位置図(2)



遺跡番号は第４表～９表に対応する。

0　1km

第34図　遺跡位置図(3)

第４表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（1）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
1	歌内	49		4			1	標高215m～225mの台地に位置し、台地南側に歌内川が西流する。 集落は調査区の南側に密集するが、広範囲に遺構が広がっていることが想定される。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書II
2	飛鳥平	8						標高203m前後の段丘に位置し、南北は沢によって区切られている。南側に鳥居平遺跡、北側に北の林Ⅰ遺跡が所在する。 住居は段丘先端部に密集する。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書III
3	北の林Ⅰ	22			9	2		標高200m～205mの段丘に位置する。南北は沢によって区切られ、南側に飛鳥平遺跡、北側に北の林Ⅰ遺跡が所在する。 住居跡は段丘先端部に密集し、その住居群は段丘に入り込んだ沢によって後背台地と分離されている。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書III
4	北の林II	11			5	11		標高200m～205mの段丘に位置する。南北は沢によって区切られ、南側に北の林Ⅰ遺跡、北側に上葛岡Ⅰ遺跡が所在する。住居は段丘全域に広がり、数棟単位に分割できる。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI
5	小豆沢館	3						標高200m程の段丘先端に構築された小豆沢館跡の一部で「館コ屋敷」と呼ばれる。 遺構の占地は不明	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI
6	上葛岡IV	12		17				標高215m前後の台地で、遺跡北側に浦志内川が位置する。 数棟に分割される住居群が広範囲に分布する可能性が高い。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書V
7	駒林	3						標高150m程の段丘先端部 小規模の集落か	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書V
8	一本杉	20						奥羽山脈の西裾に広がる高位段丘の先端部に位置し、標高は約210mを測る。住居は広範囲に分布するが数棟からなる群に分割される可能性がある。墨書土器が出土している。	秋田県教育委員会　1983年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI

第７表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（4）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
28	物見坂Ⅲ	2				1		米代川・大湯川・小坂川の合流点に延びた台地に位置する。本遺跡の南側に末期古墳が存在した「枯草坂古墳」が位置する。住居は台地のほぼ中央に位置する。	秋田県教育委員会 2003 年 『物見坂Ⅲ』国道 282 号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
29	御休堂	3						福士川の左岸に形成された台地先端に位置する。住居の密集度合いは低い。	鹿角市文化財調査資料 19 『御休堂遺跡発掘調査報告書』1981 年
30	天戸森	3						福士川右岸に形成された台地先端部。花輪第一中学校地。台地平坦部に密集することなく分布する。	鹿角市文化財調査資料 26 『天戸森遺跡発掘調査報告書』1984 年
31	高市向館跡	27	2 以上	3		3		間瀬川右岸に形成された標高 150m 程の台地。集落は台地先端に集中する傾向にある。大湯浮石の有無から 3 時期が想定される。住居跡より古い竪穴遺構が存在する。	鹿角市文化財調査資料 22 『高市向館跡発掘調査報告書』1982 年
32	下沢田	10	1	9		1		福士川の左岸に形成された標高 177m 程の台地先端。台地先端は深い溝によって切られ、これによって区切られた内部に集落が存在する。太田谷地館跡の集落占地に類似する。	鹿角市文化財調査資料 27 『下沢田遺跡発掘調査報告書』1984 年
33	地羅野	2		3				不動川の左岸に形成された標高 154m 程の台地先端。集落は調査区後方に広がる平坦部に広がる可能性がある。	鹿角市文化財調査資料 47 『地羅野館跡発掘調査報告書』1993 年
34	用野目川向Ⅲ	5		8				米代川の左岸に形成された標高 200m 程の段丘が馬の背状となった場所に位置する。調査範囲が路線幅と限定されていたが、もう少し住居数は増えるものと考えられる。	秋田県教育委員会 1989 年 『用野目川向Ⅲ遺跡』西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
35	小枝指館跡	4						根市川の左岸に形成された舌状台地の南側斜面平坦部に位置する。館跡構築時に破壊されたものがあると考えられるがその数は少ないものと考えられる。	鹿角市文化財調査資料 44 『小枝指館跡発掘調査報告書』1992 年
36	赤坂Ｂ	15		10		3		福士川の右岸に形成された標高 240m 程の段丘平坦地に位置する。住居は北側に偏在し、東西方向に広がる可能性がある。	鹿角市文化財調査資料 48 『赤坂Ｂ遺跡』総合運動公園関連遺跡発掘調査報告書 1993 年

第８表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（5）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
37	花輪古館	2						福士川の右岸に形成された標高173m程の段丘、花輪古館内に所在する。分布状況から住居の密度は薄いと考えられる。	鹿角市文化財調査資料51 『花輪古館跡発掘調査報告書』1994年
38	赤坂A (1次) (2次)	 12 4		 17 4		 2		福士川上流の右岸に形成された標高 250m の段丘南側斜面に位置する。 大湯浮石層を切って構築される住居が存在する。住居の密集度は高く、広範囲に広がる可能性が高い。	鹿角市文化財調査資料50・53 『赤坂A遺跡』『赤坂A遺跡(2)』第52回国体冬季スキー競技会施設整備事業に伴う発掘調査報告書』1994 年・95年
39	新斗米館跡(第Ⅱ次)	1						間瀬川の右岸に形成された舌状台地に位置する。 住居の密集度は低い。	鹿角市文化財調査資料16 『新斗米館跡』鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書
40	物見坂Ⅲ	1						大湯川・米代川の合流点に向うように延びた標高144m程の台地先端部に位置する。本遺跡の西側直下にある広範囲な平坦地に県教委が調査を行った物見坂Ⅲ遺跡がある。立地的な要因から別個の遺跡と考えられる。	鹿角市文化財調査資料79 『物見坂Ⅲ遺跡・物見坂Ⅱ遺跡(1)』中山間地域総合整備事業関連発掘調査報告書2005年
41	物見坂Ⅱ	1						大湯川・米代川の合流点に向うように延びた標高144m程の台地先端部に位置する。物見坂Ⅲ遺跡とは小さな沢をはさみ位置する。平成17年度調査継続	鹿角市文化財調査資料79 『物見坂Ⅲ遺跡・物見坂Ⅱ遺跡(1)』中山間地域総合整備事業関連発掘調査報告書2005年
42	菩提野	12						冷水川の上流、奥羽山脈の裾野に形成された扇状地に位置する。報告書の分布図からは密集していた様子が看取される。 大湯環状列石の構築時期を探るため、現地を踏査している。 12棟の凹地があったと聞いていたようであるが、確認できたのは6棟であった。このうち9号と命名した住居を調査している。	文化財保護委員会 『大湯町環状列石』1953年
43	大湯環状列石周辺遺跡	2						大湯川の左岸に形成された標高180m程の舌状台地。 周辺遺跡として周知されている北端に分布する。その密度は薄い。	鹿角市文化財調査資料7 『大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書』1977年

第９表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（6）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
44	大湯環状列石	27		26		4	円形周溝6	大湯川の左岸に形成された標高180m程の舌状台地。 竪穴住居の密集地域は2箇所。万座環状列石北東側及び史跡の北東端。 万座環状列石の西側台地縁に入り込んだ沢頭を中心に住居が分布する。円形周溝（円墳）は集落の北側に離れて位置する。また、史跡の北東端に入り込んだ沢頭を中心に竪穴住居の分布が確認されている。 平安時代当時、環状列石の立石が露頭していたものと考えられ、環状列石を壊していない。ただし、配石遺構が地中に埋もれていて視野に入らない場合は、住居構築の際壊している。 環状列石発見当時の史跡並びに周辺を調査した浅井小魚氏の日誌によると台地縁や猿賀神社周辺には「土饅頭」を呈した土盛りが点在していたという記事が見られる。	鹿角市文化財調査資料33・38 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』1988年・1990年 鹿角市文化財調査資料38 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』1990年 鹿角市文化財調査資料49 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』1994年 鹿角市文化財調査資料58 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』1997年 鹿角市文化財調査資料61 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』1998年 鹿角市文化財調査資料72 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』2003年
45	玉内	5		5				米代川の支流である黒沢川の右岸に形成された174m程の舌状台地先端部に位置する。調査地後方に平坦地が続くことから住居が広がることが予想される。 本遺跡の南側斜面下に「玉内環状列石」が所在する。	秋田県文化財調査報告書第171号 『玉内遺跡発掘調査報告書』一般国道282号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査1988年
46	鹿角沢Ⅱ	7		1			焼土遺構	米代川と大湯川が合流点に向かうように延びた台地先端の南側縁に位置する。遺跡南側の台地斜面の平場に枯草坂古墳がある。住居は沢頭を囲むように分布している。	2007年3月2日刊行
	確認総数	443	5	196	18	32			

4．遺跡占地の共通性

竪穴住居跡が確認された台地及び占地状況の共通点は次のとおりである。

① 現在の町並みが所在する沖積層より一段高い舌状台地・段丘上に分布する。台地先端や段丘縁に占地する。台地先端を区切るように堀や沢を入れ、集落を後方台地と分離するものもある。所謂「防御性集落」といわれるものが平安時代後半に姿を現す。

② 台地・段丘下に、飲料水の確保場所となる河川または斜面に湧水がある。

③ 地形的な要因から景観が良い。

5．竪穴住居跡の観察

(1) 平面形

確認された443棟のうち、方形を呈するものが374棟である。このほかに隅丸方形（２棟)、長方形（20棟)、略方形（２棟)、隅丸方形（１棟）と報告されている。重複・削平などによって形態が不明なものが44棟で、基本的には方形を基調とする。

また、赤坂Ａ遺跡第01号住居のように住居外に張り出した「出入り口」的な施設を持つものもある。

(2) 長軸規模と面積

第９表は、長軸の規模を示したもので長軸301cm～500cmに210棟（48%）が分布する。長軸801cmを超えるものは稀で６棟（1.3%）である。最も小さいものは柴内館跡・第623号住居跡の225cm、最も大きいものは柴内館跡・第450ａ・ｂ号住居跡の933cmである。

このうち奈良時代のものは、菩提野遺跡の第九号住居跡が長軸720cmと最も大きく、それ以外は中型のもので長軸600cmを超えるものは確認されていない。

第10表　竪穴住居跡長軸分布

（単位：m）

長軸規模	201～300	301～400	401～500	501～600	601～700	701～800	801～900	901以上	不明 計測値なし
棟数	41	108 (1)	102 (1)	64 (1)	34	15 (1)	3	3	67 (13)
比率	9.38	24.71	23.34	14.64	7.78	3.43	0.68	0.68	15.33

カッコ内は奈良時代の竪穴住居跡

第10表は住居床面積を示したものである。このうち262棟が記載されている。面積11㎡～20㎡に104棟（23.8%）を中心にその前後に集中する。最も小さいものは妻の神Ⅰ遺跡・第132号住居跡の5.05㎡、最大は高市向館跡・第14号住居跡の77.1㎡である。面積記載がないが柴内館跡・第450ａ・ｂ号住居跡を単純計算すると推定で81㎡、24.5坪強となる。

歌内遺跡・太田谷内館跡・高市向館跡など多くの遺跡では40㎡以下に収まるが、北の林Ⅰ遺跡のように41㎡を超えるものが高い割合を示す遺跡も存在する。このことからすると40㎡を境に、それ以下を小型・中型に、それ以上を大型、柴内館跡のように壁長９ｍ・面積80㎡超は特大ということができる。

第11表　竪穴住居跡床面積分布

（単位：㎡）

面積規模	10以下	11～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70	71～80	81以上	不明・計測値なし	備　考
棟数	66	104（2）	46	29	10	3	2	2（1）	0	175（14）	括弧内は奈良時代の竪穴住居数
比率	15.11	23.79	10.53	6.65	2.29	0.69	0.46	0.46	0	40.02	

(3) 柱配置

柱配置に関しては、基本的に次の７つの配置（第35図）がみられる。

配置１：住居四隅に柱穴が穿たれるもの。

長軸規模３ｍ～８ｍ範囲のものに見られるが、４ｍ～６ｍのものに集中する。中規模なものから小規模の住居跡に使用される柱配置といえる。中ノ崎遺跡ＳＩ117、下沢田遺跡ＳＩ08が最大級で、中ノ崎遺跡ＳＩ106が最小である。

２：住居四隅とその柱穴間に一個の柱穴が穿たれるもの

柴内館跡ＳＩ450ａ・450ｂが最も大きく長軸9.33ｍを測る。長軸が４ｍ～６ｍ規模のものに集中する。小規模なものから大規模なものに使用される柱配置であるが中規模なものに多用される傾向にある。

３：住居四隅とその柱穴間に複数個の柱穴が穿たれるもの

用野目川向Ⅲ遺跡ＳＩ06が最も大きく長軸8.00ｍを測る。長軸規模６ｍ～８ｍに集中し、中規模なものから大規模のものに多用される傾向にある。

４：住居四隅とその対角線上に柱穴が穿たれるもの

高市向館跡ＳＩ14が最も大きく長軸9.36ｍを測る。５ｍ以下のものはなく９ｍ以上を測るものまで切れ目なく存在する。７ｍ規模のものに集中し、大規模なものに多用される傾向にある。

５：対角線上に配置されるもの

地羅野館跡ＳＩ03が最も大きく長軸6.80ｍを測る。４ｍ～７ｍの中規模でもやや大型ものに使用される傾向にある。

６：配置３と配置５の要素を持つもの

赤坂Ｂ遺跡ＳＩ07が最も大きく長軸7.20ｍを測る。長軸６ｍ以下のものは存在しな

い。中規模から大規模のものに使用される傾向にある。柱配置から最も上屋を乗せる構造として強固な造りと判断される。

7：柱穴が確認されないもの。または柱穴（柱穴状ピット）は確認されるが、配置が定かでないもの

数量的に圧倒的に多い。上屋を持つためには柱穴は不可欠なものである。

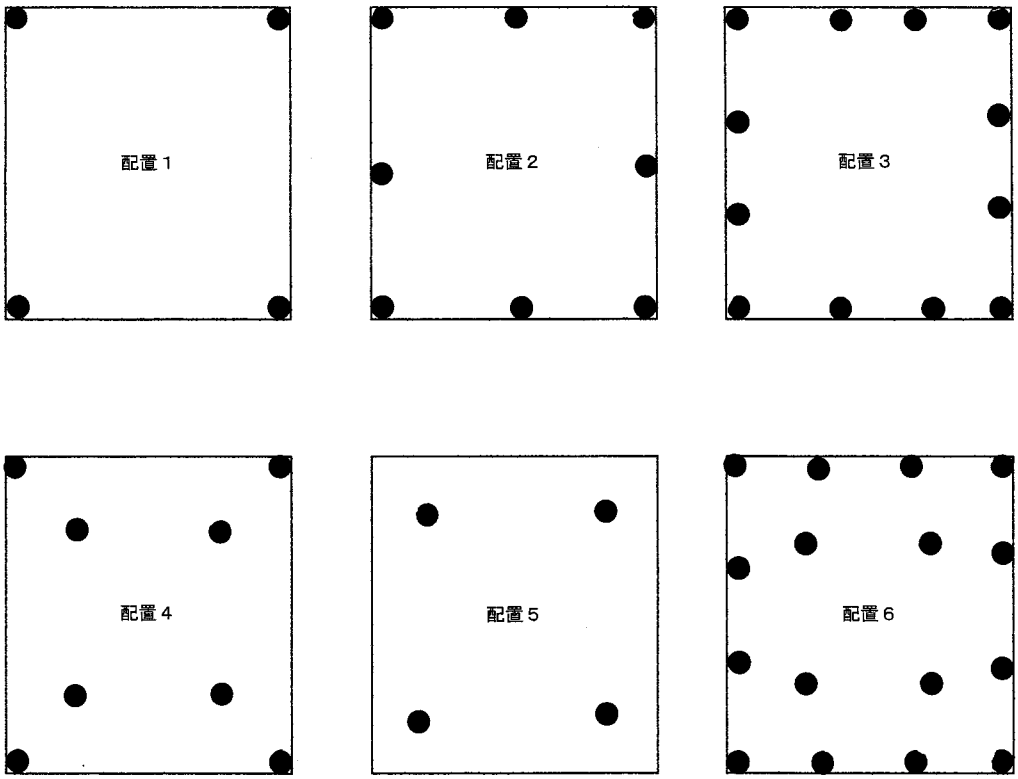
床面や壁際で数個の柱穴が確認されるが配置が特定できないものがあり、精査の際、見落としたものもあったものと考えられる。

8：その他

壁外に柱を持つものがある。

第12表　柱配置ごとの数量

柱配置	配置１	配置２	配置３	配置４	配置５	配置６	配置７	配置８
棟数	86	53	37	22	9	7	224	5



第35図　柱配置模式図

第13表　住居跡の規模と柱配置

	3m以下	4m以下	5m以下	6m以下	7m以下	8m以下	9m以下	9m以上	規模不明
配置1	11	22	29	18	2	2			2
配置2	2	10	16	11	6	1		2	5
配置3	1	3	4	10	9	4			6
配置4			2	4	10	3	2	1	
配置5		3	1	3	2				
配置6				1	4	2			

(4) カマドの位置（主軸方向）

一棟に複数のカマドが付設されているものもある。最も多くカマドが造られた住居は下乳牛遺跡02号住居で４基（期）である。カマド一つ一つを一棟としてその数値を拾い上げていくと総数456棟となる。このうちカマドが併設されるもの317棟、地床炉８棟、不明・確認できなかったもの131棟である。

カマドは壁際に位置する。柱状の川原石を袖部・天井部の心材とし、これに粘土を貼り付けたものが大半を占める。煙道部は短く屋外に立ち上がる所謂「関東型」と呼ばれるものが多い。煙道部が長く半地下式のものやトンネル式の「東北型」と呼ばれるものもあり、半地下式のものとしては高市向館跡第31号住居跡、トンネル式のものは下乳牛遺跡第02号住居跡で、煙出部には底部が欠損した甕形土器が設置されていた。

本来、壁際に付設されるものであるが、下沢田遺跡第04号竪穴住居のように煙道を持たず、カマド本体のみが壁際から離れて付設されるものもある。

カマドの付設される位置を確認すると、南壁に付設されるものが207棟と圧倒的に多く、これに見せかけの南壁（南東壁）を加えると222棟となる。これに続くのは東壁で、西壁・北壁は極端に数値が小さくなる。

集落を構成する住居跡で、最も南壁にカマドが付設される割合が高いのは、北の林Ⅰ遺跡・北の林Ⅱ遺跡・赤坂Ａ遺跡であり、まとまりを見せないのが高市向館跡・中の崎遺跡である。これら集落の営まれた台地を観察するといずれも奥羽山脈の裾野に広がり、河川によって形成された西側に延びた舌状を呈する台地で、特異な地形的な変化は認められない。

以前、カマドが作られる位置を風向き・規制の有無によるものか検討した。風向きについては平成15年・16年（第２表）と当時（奈良・平安時代）の風向きについては比較しようがないが、風向きは西・南西側が数値的に多い。単純に考えていくとカマド燃焼部で火が焚かれ、発生した熱や煙は煙道（煙突）を通り屋外と排気される。南壁にカマドが付設された場合、南風が吹くと煙道にその風が入り込む可能性は高く、熱や煙は室内へと流れ込む結果となる。平成

15年度・16年度の観察によると南風が吹く回数は少なく、このようなことからカマド構築場所は風向きと関連している可能性が高い。

第14表　カマドの位置

上段：棟数　下段：割合%

東壁	南東壁	南壁	南西壁	西壁	北西壁	北壁	北東壁	床面	不明
60	15	207	11	13	0	7	4	8	131
13.15	3.29	45.40	2.42	2.85	0	1.53	0.86	1.72	28.78

(5) 出土遺物

出土遺物としては、土師器、須恵器、木製品、鉄製品、石製品が出土している。

土師器には坏、甕、鍋の器形が見られる。坏は非ロクロ成形とロクロ成形の二通りが見られ、いずれにも黒色処理が施されたものもみられる。また、小平遺跡からは「寺・日願」と墨書された坏が出土しており、平安時代前半にはすでに鹿角の地に仏教が伝播していたことをうかがい知る事ができる。甕は長胴のものとずんぐりしたものがあるほか、把手付土器がみられる。丸底の坏には長胴のもので、頸部に段を有した甕が伴っている。また、底部に特色を持ったもので「砂底」と呼ばれるものも存在する。

現在、市内で最も古い時期に当たるものは物見坂Ⅲ遺跡（鹿角市教委調査分）、小枝指館跡出土のものである。

須恵器には坏、甕、壺、皿の器形が見られ、出土量としては甕が多いものと考えられる。歌内遺跡からは須恵器甕胴部破片を利用した硯１点が出土している。地羅野館跡や赤坂Ａ遺跡からは「五所川原産」の特徴をもったものも出土している。

木製品の出土量は極めて少なく、中の崎遺跡・下乳牛遺跡から櫛各１点、下乳牛遺跡から皿が出土している程度である。

鉄・銅製品には蕨手刀、紡錘車・刀子や帯金具がある。蕨手刀は物見坂Ⅰ遺跡で検出された古墳周湟より出土したもので、石井分類のⅡ類にあたる。

石製品には砥石・石帯・がある。

(6) 構築（廃棄）時期

歴史時代の遺構の構築・廃棄時期を知る上で大湯浮石層の存在がある。

大湯浮石の降下年は『扶桑略記』の記事から、延喜15年７月（西暦915年）と言われており、少しずつであるが実年代が明らかにされている。

遺構確認の際、浮石層上面で遺構確認を行うと浮石層を切って構築されるもの、浮石層を除去すると窪地に浮石が堆積しているものが観察される。原則的に前者は浮石降下以後、後者は降下前に構築されたものと判断し、前者を平安時代後半、後者を前半と表記しているものが多

い。

遺構の構築・廃棄時期については、大湯浮石を鍵層としながら、出土遺物や重複関係、さらに他遺跡の調査事例を参考に時期を決定する必要がある。

6．鹿角市内の奈良・平安時代の竪穴住居跡の特徴

鹿角市内で発見された奈良・平安時代の竪穴住居の特徴を列記し、まとめとする。

(1) 占地の共通性

舌状台地・段丘上に所在し、しかも台地・段丘縁に占地する。現在、市街地が所在する沖積地からは当該時期の集落は確認されていない。平安時代後半になると台地を区切るように堀を入れ、その中で生活を営む所謂「防御性集落」が出現する。

(2) 平面形

方形を基本とする。出入り口状の施設を有するものもある。

(3) 柱配置

柱配置には８つのパターンがみられる。配置１が最も多いが、四隅に配置された柱で上屋を支える構造となっている。小規模な住居であれば上屋を支える強度を持つものと考えられるが壁長が７m以上を測るものがある。桁を支えるには柱間隔が余りにも広く、四隅の柱間に存在していた柱若しくは痕跡を見逃していた可能性を指摘できる。

(4) カマドの位置（主軸方向）

南壁もしくは見せかけの南壁（南東壁・南西壁）に付設されるものが多い。カマド袖の芯材として一般的には川原石を用いている。土器破片を心材とするものや地山を掘り残し袖部とするものは極めて少ない。

煙道は短く壁外に短く立ち上がるものと、煙道が長くトンネル式又は半地下式のものがある。後者には川原石や白色粘土を用いるものや煙出部に土師器甕を設置するものも見られる。数量的には前者が圧倒的に多い。

(5) 出土遺物

遺構内・遺構外からの出土量は他地域と比較し、少ないものと考えられるが、土師器、須恵器、鉄・銅製品、木製品、石製品と各種である。

(6) 構築（廃棄）時期

大湯浮石層（十和田ａ降下火山灰）を鍵層としている。この鍵層があるためか時代決定は大まかになっているところがある。土師器・須恵器の編年、他遺跡の調査事例と照らし合わせ、時代・時期を決定していく必要がある。

（藤井安正）

第15表　竪穴住居跡観察表（1）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
1	歌内	SI001	方形	580×516 (30.0)	南壁の東寄り 崩壊		確認できず		N−0−W		土師器・須恵器・砥石・鉄鏃・トチの実 壁溝がほぼ一巡、焼失家屋	平安後半
2	歌内	SI002	方形	410×508 (17.9)	南西隅に焼土		配置不明		N－16.5－E	自然堆積 火山灰層有	土師器・砥石 SX007→SI002	平安後半
3	歌内	SI003	方形	394×390 (16.5)	南西隅に焼土		確認できず		N−6−W		土師器 SI004→SI005→SI003	平安後半
4	歌内	SI004	方形		確認できず		確認できず		N−9−W		SI004→SI005→SI003	平安後半
5	歌内	SI005	方形	375×355	南壁の東寄り 地下式の煙道	粘土 川原石			N−3−W		土師器 壁溝がほぼ一巡 SI004→SI005→SI003	平安後半
6	歌内	SI006	方形	360×390 (14.1)	東壁の南寄り	粘土 川原石	配置不明				土師器 壁溝がほぼ一巡 北壁・南壁の一部に張り出し	平安後半
7	歌内	SI007	方形	390×370 (19.0)	南壁の東寄り 崩壊	粘土	四隅に配置	四隅ピット ×22～58	N－29.5－E		土師器 壁溝がほぼ一巡か	平安後半
8	歌内	SI008	方形	290×270 (7.2)	東壁の北寄り 崩壊	粘土 川原石	北壁に２個		N－38.5－E		土師器 壁溝がほぼ一巡	平安後半
9	歌内	SI009A	方形	595×570 (33.1)	南壁の東寄り 崩壊		四隅と対角線上	四隅ピット ×23～30 対角線上ピット ×51～	N−10−W		土師器・砥石 壁溝がほぼ一巡 SI009A→SI009B→SK020	平安後半
10	歌内	SI009B	方形	682×584 (39.7)	南壁の西寄り 崩壊	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×23～37 対角線上ピット ×37～51	N−10−W		壁溝がほぼ一巡か SI009A→SI009B→SK020 (SI009A 東側を拡張)	

第16表　竪穴住居跡観察表（2）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
11	歌内	SI010A	方形	424×346 (14.5)	南壁の西寄り 良好に残る	粘土 川原石	床面に7個 配置不明		N−13−E		南・北・東壁の一部に壁溝 カマドはSI010Bでも使用される SI010A→SI010B→SI010C	平安後半
12	歌内	SI010B	方形	532×434 (21.4)	SI010Aのものを使用		四隅	四隅ピット ×29〜10	N−17.5−E		北・東壁の一部に壁溝 カマドはSI010Aのものを使用 SI010A→SI010B→SI010C	平安後半
13	歌内	SI010C	方形	600×575 (34.3)	南壁の東寄り 崩壊		四隅	四隅ピット ×19〜33	N−12.5−E		土師器・穂摘具・鉄釘 SI010A→SI010B→SI010C	平安後半
14	歌内	SI011	方形	330×320 (10.2)	北壁の東寄り 良好に残る	粘土	不明	カマドの煙出しを囲んで5つのピット	N−0.5−W		土師器 壁溝はカマドを除き一巡	平安後半
15	歌内	SI012	方形	425×380 (16.6)	南壁の東側隅	粘土 川原石 支脚あり	床面に5個 配置不明		N−23−E		土師器 SI012→SK022	平安後半
16	歌内	SI013	方形	286×268 (7.7)	東壁の南寄り	粘土	四隅とその中間	四隅ピット ×12〜32	N−47−W		土師器 南壁に三角状の張り出し C14測定値　930±75y BP 壁溝はカマドを除き一巡	平安後半
17	歌内	SI014	方形	470×438 (17.5)	南側床面に形跡有り		不明		N−21−E	浮石を含む	土師器・鉄釘 西側を除き壁溝あり 住居内に小土坑3基あり	
18	歌内	SI015	方形	675×580 (38.8)	南壁の東寄り 良好	粘土 川原石	四隅と対角線上の8本	四隅ピット ×30〜43 対角線上ピット ×20〜54	N−20−E	浮石含む	土師器・須恵器・穂積具 焼失家屋 南・東壁際に壁溝あり SI015→SK019	
19	歌内	SI016	方形	350×346 (19.1)	南壁の東寄り 良好	粘土 川原石	なし		N−28−E		土師器・須恵器 カマドを除き各壁際に全周 SI016→SI018・SI016→SK015	

第17表　竪穴住居跡観察表（3）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
20	歌内	SI017	方形	420×360 (15.4)	東壁の北寄り	粘土 川原石	床面にピット 配置不明		N—61.5— W		土師器・須恵器・砥石	平安後半
21	歌内	SI018	方形	377×342 (34.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N—9.5— W		土師器・紡錘車 C14測定値　1300±80y BP SI016・SK009→SI018	平安後半
22	歌内	SI019	方形	320×315 (10.3)	南壁の西寄り	粘土 土師器 片	壁際より確認 配置不明		N—27.5— E	浮石含む	土師器 C14測定値　1060±85y BP 壁溝はカマド部分を除き断続的に一巡 SI019→SD010	平安後半
23	歌内	SI020	方形	380×350 (13.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面に3個 配置不明		N—15—E	浮石含む	土師器 SI020→SD007	平安後半
24	歌内	SI021	方形	555× (　)	重複により確認されず		四隅とその中間、	四隅ピット ×30～40	N—17—E		土師器 SI021→SD006・007	平安後半
25	歌内	SI022	方形	436×364 (16.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	隅より少し離れた対角線上	対角線上ピット ×20～33	N—19—E	カマド内に浮石混入	土師器 SK(F)033→SI022→SD006	平安後半
26	歌内	SI023A	方形	372×354 (13.2)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×19～41	N—18—E	カマド内に浮石混入	土師器・砥石・小刀 SI023B→SI023A(増築)	平安後半
27	歌内	SI023B	方形	484×450 (22.8)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×30～36	N—19—E	カマド内に浮石混入	SI023B→SI023A(増築)	
28	歌内	SI024	方形	585×580 (33.2)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×26～49 対角線上ピット ×13～38	N—16—E		土師器 SK(F)033→SI024→SD007・012	
29	歌内	SI025	方形	315×310 (10.2)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N—7.5— W		土師器・鉄釘 SI025→SI026	

第18表　竪穴住居跡観察表（4）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
30	歌内	SI026	方形	476×432 (20.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×23～53 対角線上ピット ×39～40				平安後半
31	歌内	SI027	方形	400×375 (16.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−8.5−W		土師器・穂摘具 焼失家屋 SI027→SD003・004・015	平安後半
32	歌内	SI028	方形	235×260 (5.9)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面にピット 特定できず		N−15−E		土師器 焼失家屋 SI028→SD012・013・015	平安後半
33	歌内	SI029	不整形		中央付近に焼土		床面にピット 特定できず				土師器 攪乱により破壊が著しい	平安後半
34	歌内	SI030A	方形	275×270 (8.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×18～29	N−7.5−W		土師器	平安後半
35	歌内	SI030B	方形	435×430 (20.2)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×20～33	N−3.5−W	浮石含む	カマド内より木製品 焼失家屋 本住居はSI030Aを拡張したもの 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
36	歌内	SI031A	方形	460×448 (　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×20～30	N−1−W		土師器・砥石・金属器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
37	歌内	SI031B	方形	554×532 (　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×6～8		浮石含む	土師器 本住居はSI031Aを拡張したもの 壁溝は東壁際・北西角にある	
38	歌内	SI032	方形	370×310 (11.8)	南壁の東寄り 煙道が長い	粘土 川原石	床面にピット (壁外か)		N−19−E	カマド内に浮石	土師器 SI032→SD006	
39	歌内	SI033	方形	370×350 (13.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面に1個のピット		N−13.5−E		土師器・鉄器	

第19表　竪穴住居跡観察表（5）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
40	歌内	SI034	方形	480×445 (21.8)	南壁の西寄り		床面に 2 個のピット		N−22−E		土師器・鉄器 カマド部分を除き一巡	平安後半
41	歌内	SI035	方形	480×400 (19.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−19.5−E		土師器・紡錘車	平安後半
42	歌内	SI036	方形	320×308 (10.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面に 2 個のピット 柱配置特定できず				土師器 北壁際に壁溝あり	平安後半
43	歌内	SI037	方形	278×280 (8.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−10−W		土師器	平安後半
44	歌内	SI038	方形	340× (　)	南壁の東寄り		床面に 1 個のピット		N−10−E		土師器 農道・排水溝により北東部を消失	平安後半
45	歌内	SI039	方形	325×320 (10.8)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−26−E		土師器	平安後半
46	歌内	SI040	方形	309×256 (8.9)	南壁の東寄り	粘土	確認できなかった		N−25.5−E		土師器・穂摘具	平安後半
47	歌内	SI041	方形	520×450 (23.0)	南壁の東寄り 東壁の南寄り		四隅とその中間	四隅ピット ×23〜31	N−29−E	堆積土上層に浮石	カマド2基、新旧不明 土師器・紡錘車 焼失家屋 カマド部分を除き一巡	平安後半
48	歌内	SI042	方形	316× (　)			確認できなかった				農道により南側半分を消失	平安後半
49	歌内	SI045	方形				床面に 4 個のピット 柱配置特定できず				SI045→SD030・SK064	平安後半
50	歌内	SI046	方形	250×243 (12.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石					土師器	平安後半

第20表　竪穴住居跡観察表（6）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模（径×深さ）				
51	歌内	SI047	方形	305×265 （8.4）	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−31−E	浮石含む	土師器・垂飾品 壁溝はカマド・同西側、北西コーナーを除き確認された	平安後半
52	歌内	SI048	方形	335×345 （12.1）	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−28.5−E		土師器 壁溝は南壁を除く各壁際で確認	平安後半
53	歌内	SI049	方形	260× （　）	南壁のほぼ中央	粘土 川原石	確認できなかった		N−26−E		土師器	平安後半
54	歌内	SI050	方形		南壁		四隅	四隅ピット ×50〜54	N−22−E		土師器 カマド部分を除き一巡か 南側を排水溝で消失	平安後半
55	歌内	SI051	方形	434× （　）			床面に2個 柱配置特定できず				土師器・硯(須恵器片を転用) 壁際に接して壁溝を確認 住居北側を消失	平安後半
56	飛鳥平	SI003	方形	560×548 （32.63）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−7−E	浮石含む	土師器 壁溝はカマド東側一部と北壁の一部を除き一巡	
57	飛鳥平	SI004	方形	487× （　）	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅＋南壁外にピット		N−3−E		土師器・石器 カマド部分を除き一巡	平安後半
58	飛鳥平	SI009	方形	443×439 （20.91）	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−11−E		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 東側南半を拡幅	平安後半
59	飛鳥平	SI011	方形	497×485 （21.56）	南壁の西寄り	粘土 川原石	壁溝内に5個のピット 配置特定できず		N−15−W		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
60	飛鳥平	SI012	方形	376×323 （12.83）	東壁の北寄り	粘土 川原石			N−5−W		C14測定値　790±75y BP	平安後半

第21表　竪穴住居跡観察表（7）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模（径×深さ）				
61	飛鳥平	SI013	方形	660×648 （42.15）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−11−W	浮石含む	壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
62	飛鳥平	SI035	方形	375×202 （7.10）	南壁の西寄り	粘土 川原石			N−21−E	浮石含む	土師器	平安後半
63	飛鳥平	SI041	方形	412× （　）						浮石含む		平安後半
64	北の林Ⅰ	SI001	方形	387×361 （12.6）	南壁の東寄り	粘土	四隅とその中間	四隅ピット ×13〜54	N−0−S		土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
65	北の林Ⅰ	SI002		×　（　）	南壁							平安後半
66	北の林Ⅰ	SI003	方形	697×695 （47.2）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×60〜72 対角線上ピット ×57〜81	N−3−W	浮石含む	土師器、須恵器、砥石、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 焼失家屋	平安
67	北の林Ⅰ	SI004	方形	626×625 （39.9）	南壁のやや東寄り	粘土	四隅と対角線上	四隅ピット ×30〜37 対角線上ピット ×10〜34	N−2−W	カマド内に浮石粒混入	土師器、須恵器、砥石、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI005→SI004	平安
68	北の林Ⅰ	SI005	方形	674×650 （44.3）	南壁の西寄り	粘土	四隅と対角線上	四隅ピット ×36〜55 対角線上ピット ×36〜60	N−3−W		土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI005→SI004	平安
69	北の林Ⅰ	SI006	方形	373×353 （13.6）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×28〜30	N−1−W		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安

第22表　竪穴住居跡観察表（8）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模（径×深さ）				
70	北の林Ⅰ	SI007	方形	740×700 (49.4)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその間に3～4個のピット、対角線上	四隅ピット ×28～30 対角線上ピット ×51～72	N－1－E		重複・拡張の可能性がある SI007→SD008	平安
71	北の林Ⅰ	SI008A	方形	285×281 (8.4)	南壁の東寄り		四隅	四隅ピット ×21～26	N－5－W		壁溝はカマド部分を除き一巡 SI008A→SI08B	平安
72	北の林Ⅰ	SI008B	方形	352×337 (12.1)	南壁の東寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×28～46	N－5－W	浮石多量混入	土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI008A→SI08B	平安
73	北の林Ⅰ	SI009	方形	392×357 (13.4)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×25～31	N－91.5－E	浮石粒含む	土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
74	北の林Ⅰ	SI010	方形	417×396 (16.7)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×20～33	N－5－E		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 煙道が長い	
75	北の林Ⅰ	SI011	方形	364×360 (14.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×20～30	N－7.5－W	浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
76	北の林Ⅰ	SI012A	方形	351×348 (12.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×10～50	N－1－W		土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI012A→SI012B	
77	北の林Ⅰ	SI012B	方形	521×518 (22.6)	南壁の東寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×20～40	N－1－W		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI012A→SI012B カマドは継続使用	
78	北の林Ⅰ	SI013	方形	343×322 (10.8)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×37～52	N－13－E		壁溝はカマド部分を除き一巡	
79	北の林Ⅰ	SI014	方形	462×446 (21.0)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×36～46	N－13－E		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	

第23表　竪穴住居跡観察表（9）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
80	北の林Ⅰ	SI015A	方形	502×460 (19.9)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×30～42	N−7−W		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
81	北の林Ⅰ	SI015B	方形	665×642 (43.6)	南壁の西寄り		四隅と対角線上	四隅ピット ×26～44 対角線上ピット ×36～57	N−13−W	浮石粒混入	壁溝はカマド部分を除き一巡 SK(T)003→SI015A→SI015B	
82	北の林Ⅰ	SI016	方形	361×350 (10.9)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×39～59	N−13−W	浮石粒混入	土師器、鉄さい、直刀 壁溝はカマド部分を除き一巡 焼失家屋	
83	北の林Ⅰ	SI017	方形	655×645 (41.8)	南壁の東寄り		四隅とその間に3個のピット、対角線上	四隅 ×21～56 対角線上 ×60～65	N−2−E	浮石粒混入	土師器	
84	北の林Ⅰ	SI018	方形	451×437 (22.1)	南東壁の南西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×16～33	N−21.5−W		土師器、鉄さい、 壁溝はカマド部分を除き一巡	
85	北の林Ⅰ	SI019	方形	470×468 (22.0)	南東壁の北西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×31～57	N−13−W	浮石粒混入	土師器、須恵器、鉄さい、 壁溝はカマド部分を除き一巡	
86	北の林Ⅰ	SI020	方形	233×227 (6.0)	南壁の東寄り	粘土 黒色土			N−9−W	浮石層有り	土師器、須恵器	
87	北の林Ⅰ	SI021	方形	364×352 (13.2)	南壁の西寄りに焼土		四隅	四隅ピット ×14～42			土師器、須恵器	
88	北の林Ⅰ	SI022	方形	423×396 (15.6)			四隅	四隅ピット ×3～38			土師器、鉄さい	
89	北の林Ⅱ	SI001A	方形	452×447 (19.84)	南壁の東側	粘土 土師器	四隅		S−1−W	浮石粒混入	土師器(砂底あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
90	北の林Ⅱ	SI001B	方形	452×447 (19.84)	南壁の西側		四隅		S−1−W		カマドは壁溝を埋め構築される。 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI001A→SI001B	

第24表　竪穴住居跡観察表(10)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
91	北の林II	SI002	方形	441×432 (19.44)	南壁の西寄り		四隅		S−1−W		土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡 焼失家屋	
92	北の林II	SI003	方形	452×406 (17.38)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		S−6−W		土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
93	北の林II	SI004	方形	638×634 (40.48)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅、西壁と北壁溝にピット		S−6−E	カマド粘土に浮石粒	土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
94	北の林II	SI005	方形	342×326 (10.0)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−5−W	浮石粒を多量に含む	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
95	北の林II	SI006	方形	457×450 (22.66)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−11−E	浮石粒を多量に含む	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 床の北東側に土坑	
96	北の林II	SI007	方形	457×450 (22.66)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−7.45−W	浮石粒を多量に含む	土師器 壁溝は北壁・東壁・西壁一部 煙道部が長い	
97	北の林II	SI008	方形	336×309 (11.16)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−2−W	浮石粒を多量に含む	土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
98	北の林II	SI009	方形	468×422 (19.2)	南壁の東寄り		四隅		S−6.3−E	浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
99	北の林II	SI010	方形	371×350 (14.28)	南壁の西隅	粘土 川原石	四隅		S−3−E	浮石粒混入	土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
100	北の林II	SI013	方形	351×342 (10.0)	南壁の南西隅		四隅		S−10−E		壁溝はカマド部分を除き一巡	
101	小豆沢館	SI002	方形	232×226 (5.74)	付設されず				N−56−W		壁溝は一巡する可能性あり	平安
102	小豆沢館	SI004	方形	542×443 (20.54)	付設されず		特定できず		N−52.3−E			平安

第25表　竪穴住居跡観察表(11)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
103	小豆沢館	SI005	方形	416×400 (16.34)	付設されず		四隅とその中間		N－46.3－E		壁溝は一巡する可能性あり	平安
104	上葛岡IV	SI001	方形	514×486 (24.64)	東壁の北寄り		四隅とその中間	四隅ピット 25～29×23～27 中間ピット	N－99.5－W	堆積土・カマド粘土に浮石粒混入	土師器、須恵器、炭化堅果類(トチ) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
105	上葛岡IV	SI002	方形	442×440 (18.72)	東壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 14～30×22～37	N－2－W	堆積土・カマド粘土に浮石粒混入	土師器、土製玉 壁溝はカマド部分を除き一巡	
106	上葛岡IV	SI003	方形	498×498 (24.84)	西壁の北寄り	粘土	確認できず		N－108.5－E	浮石粒混入	土師器、鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡	
107	上葛岡IV	SI004	方形	448× (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 15～20×20	N－83－W	浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
108	上葛岡IV	SI005	方形	342×282 (8.08)	東壁の南寄り		住居外 特定できず		N－94－W		土師器 煙道部が長い	平安
109	上葛岡IV	SI006	方形	370×350 (12.08)	南壁の中央	粘土 川原石	確認できず		N－107－W	浮石粒混入	土師器	
110	上葛岡IV	SI007A	方形	456×449 (20.24)	東壁の南寄り		特定できず		N－85－W	浮石粒混入	土師器、鉄製品 SI007A→SI007B	
111	上葛岡IV	SI007B	方形	702×684 (39.6)	東壁の南寄り		特定できず		N－83.6－W	浮石粒混入	カマドはSI007Aと共用 SI007A→SI007B	
112	上葛岡IV	SI008	長方形	531×435 (20.0)	南壁の東・西寄りに2基		四隅	四隅ピット 20～24×11～27	N－7－E	浮石粒混入	南壁の東寄りのカマドが古い 土師器 煙道が長く、トンネル式	
113	上葛岡IV	SI009	長方形	565×464 (24.4)	東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 10～25×14～26	N－2－E	浮石粒多量混入	土師器、鉄製品 SI010→SI009	

第26表　竪穴住居跡観察表(12)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
114	上葛岡Ⅳ	SI010	方形	852×828 (64.16)	SI010 により崩壊		四隅と対角線上	四隅ピット 20～40×8～19 対角線上ピット 21～58×23～45	N−2.5−W		SI010→SI009 土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	
115	上葛岡Ⅳ	SI011	方形	564×530 (26.64)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 19～23×12	N−1−E	浮石粒混入	土師器	
116	上葛岡Ⅳ	SI012	方形	596×504 (29.2)	南壁の西寄り		四隅	四隅ピット 24～33×14×25	N−6−E	浮石粒混入	土師器	
117	駒林	SI001	方形	370×358 (12.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石			N−16−W	浮石粒混入	土師器、須恵器、砥石、フイゴ羽口 煙道が長く、トンネル式	
118	駒林	SI002	方形	470×438 (18.54)	南壁の西寄り	粘土 川原石	各隅の壁外	34～40×35×43	N−0.5−E	浮石粒混入	土師器、フイゴ羽口 煙道が長く、トンネル式 焼失家屋	
119	駒林	SI003	方形	388×332 (11.98)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−19.5−W	浮石粒混入	土師器	
120	一本杉	SI003	方形	420.5×272.5 (16.56)	床面中央に地床炉		四隅とその中間に2個ずつ		S−24−E	浮石粒混入	土師器(墨書あり)	
121	一本杉	SI004	方形	318.5×249.0 (7.98)	南壁の東寄り	粘土 川原石	特定できず		S−3−W	浮石粒多量混入	土師器(墨書あり)、陶磁器 北東隅の床面壁寄りに壁溝あり	平安後半
122	一本杉	SI005	方形	329.5×318.5 (9.92)	南壁の東寄り 南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		S−3.3−E	浮石粒多量混入	土師器 カマドの作り替えあり 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
123	一本杉	SI006	方形	587.5×562.5 (33.86)	南壁の西寄り	粘土 土師器	四隅		S−1−W	浮石粒多量混入	土師器	平安後半
124	一本杉	SI007	方形	552.5× (　　)	破壊されていた		四隅とその中間に数個ずつ				土師器	

第27表　竪穴住居跡観察表(13)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
125	一本杉	SI009	方形	341.5×320.5 (11.65)	付設されず		四隅とその中間				土師器	
126	一本杉	SI010	方形	《732.0×450.0》 (　　)	床面北東側に2基の地床炉		四隅とその中間に2個ずつ				土師器 調査担当者は柱配置から4棟の住居の存在を考えている。	
127	一本杉	SI011	方形	479.5×407.5 (19.65)	付設されず		四隅とその中間に数個ずつ		S—1—W	浮石粒混入	土師器、須恵器 SI012→SI011	
128	一本杉	SI012	方形	371.0×365.5 (13.63)	南壁の中央(重複により崩壊)		特定できず		S—3.3—W		土師器(墨書あり) SI012→SI011	
129	一本杉	SI013	方形	378.5×354.5 (14.02)	南壁の東寄り	粘土 川原石			S—2.3—W	浮石粒多量混入	土師器(墨書・砂底あり)、須恵器 焼失家屋 東・西壁際の一部に壁溝あり	
130	一本杉	SI014	方形	× (　　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		S—2—E		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	
131	一本杉	SI015	方形	《315.5×254.5》 (9.08)	不明		四隅とその中間に数個ずつ		S—2—E		土師器	
132	一本杉	SI016	方形	453.5× (　　)	不明		四隅				土師器、陶磁器	
133	一本杉	SI017	方形	305.5×296.0 (8.70)	不明		特定できず				土師器、須恵器	
134	一本杉	SI018	方形	× (　　)	不明		特定できず			浮石粒多量混入	土師器	
135	一本杉	SI019	方形	× (　　)	不明		特定できず			浮石粒多量混入	土師器、須恵器 焼失家屋	
136	一本杉	SI020	方形	× (　　)	不明		四隅とその中間				土師器	
137	一本杉	SI021	方形	348.5× (　　)	不明		四隅とその中間				東壁際に壁溝	

第28表　竪穴住居跡観察表(14)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
138	一本杉	SI030	方形	306.5×279.5 (8.76)	東壁の北寄り 東壁の南寄り		特定できず		S－38.30－ E	浮石粒混入	土師器(砂底あり) 東寄りのカマドは撹乱により崩壊	
139	一本杉	SI031	方形	345.5×334.5 (10.44)	南壁の西寄り		特定できず		S－3－W	浮石粒混入	土師器、須恵器 東壁際に壁溝	
140	案内III	SI001	方形	525×508 (27.93)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅ピット 18～26×38～53 中間ピット 17～31×38～43	S－9－W	浮石多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・トチの実 壁溝はカマド部分を除くほぼ一巡 本住居のみが東壁にカマドが作られる	
141	案内III	SI002	方形	312×277 (9.38)	南壁の西寄り		住居外か		N－16－E	浮石多量混入	土師器・須恵器 廃棄後に焼失	平安前半
142	案内III	SI006	方形	319×318 (10.88)	東壁の南寄り	粘土 川原石			N－102 －E	浮石多量混入	土師器 床面に土坑2基 壁溝は南西隅のみ	
143	案内III	SI009	方形	452×377 (15.48)	西壁の北寄り	粘土 川原石			S－94－W	浮石ブロック混入	土師器・須恵器・フイゴ羽口	平安後半
144	案内III	SI010	方形	578×575 (31.64)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 30～35×52～57	N－10.5 －E	浮石多量混入	土師器・須恵器・金属器(鉄鏃・鉄斧) 炭化物 焼失家屋、カマドの煙道が長い 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI011・012→SI010	
145	案内III	SI011	方形	403× (　　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅か		N－8.5 －E	浮石多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・穂摘具 カマドの煙道が長い SI011・012→SI010	
146	案内III	SI012	方形	253×237 (5.89)	南壁の西寄り	粘土 川原石			N－10.5 －E	浮石多量混入	カマド煙道はトンネル式 SI011・012→SI010	
147	案内III	SI014	方形	502×451 (21.03)	南壁の西寄り	粘土 川原石	不明		N－6.5 －E	上層に浮石が多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・砥石・鉄製品 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	

第29表　竪穴住居跡観察表(15)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
148	案内III	SI015		371×329 (9.06)	南壁の西寄り	粘土 川原石				浮石多量混入	土師器(砂底あり)	
149	案内III	SI016	方形	386×305 (11.17)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅ピット 中間ピット 18～31×26～37	N−3.5−E	浮石多量混入		平安後半
150	案内III	SI017	方形	385×363 (13.54)	南壁の西寄り	粘土 川原石	特定できず		N−2.5−E	浮石混入	土師器 カマド煙道はトンネル式	平安後半
151	案内III	SI018	方形	378×348 (12.78)	南壁の東寄り	粘土 川原石			N−8−W	浮石多量混入	土師器(砂底あり) 壁溝は東・西・北壁際に造られる	平安後半
152	案内III	SI019	方形 (台形)	383×354 (12.41)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 15～31×12～26	N−5−E	浮石多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・鉄製品 壁溝は東・西・北壁際に造られる	
153	中の崎	SI001	方形	658×631 (41.1)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に3本		N−21−E	浮石多量混入	土師器、鉄製品、羽口 壁溝はカマド部分を除き一巡	
154	中の崎	SI002	方形	531×500 (27.2)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間、対角線上		N−34−E	浮石混入	土師器(砂底あり)、砥石、櫛 壁溝はカマド部分を除き一巡	
155	中の崎	SI003	方形	325×338 (12.4)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−52−E	浮石混入	土師器(砂底あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡 溝状遺構が付設される	
156	中の崎	SI008	方形	282×254 (7.8)	南西壁の南寄り	粘土 川原石	確認できず		N−45−W	浮石多量混入	土師器(砂底あり) カマド煙道部はトンネル式	
157	中の崎	SI009	方形	450×441 (19.7)	南壁の西寄り	粘土	四隅		N−28−E	上層に浮石混入	土師器 壁溝は南・東壁際に造られ、北東隅から壁外に伸びる	
158	中の崎	SI012	方形	528×515 (28.9)	南西壁の南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−31−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、砥石 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	

第30表　竪穴住居跡観察表(16)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
159	中の崎	SI018	方形	240×230 (5.2)	西壁の北端		確認できず		N−40−E	浮石混入	土師器 住居北端から溝状遺構が伸びる	
160	中の崎	SI034	方形	244×265 (7.1)	不明		四隅			上層に浮石混入	土師器	
161	中の崎	SI101	方形	446×452 (20.1)	不明		四隅		N−14−E		土師器 焼失家屋	
162	中の崎	SI102	方形	527×480 (24.8)	西壁の北寄り	粘土 川原石	四隅		N−27−E	カマド際に浮石	土師器(砂底あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
163	中の崎	SI103	方形	409×380 (14.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石	不明		N−32−E		土師器 各壁際に断続して壁溝	
164	中の崎	SI104	方形	377×318 (13.2)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−21−E		土師器、石製品 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	
165	中の崎	SI106	方形	235×195 (4.5)	西壁の中央	粘土 川原石	四隅?		N−29−E	浮石混入	土師器	
166	中の崎	SI107	方形	608×540 (35.2)	南壁の中央		四隅とその中間		N−28−E		土師器(鍋あり) 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	
167	中の崎	SI108	方形	371×362 (15.2)	南壁の西寄り		四隅		N−32−E	浮石多量混入	土師器、砥石 壁溝はカマド部分を除き一巡	
168	中の崎	SI112	方形	632×608 (43.9)	南壁の西寄り 東寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−38−E	浮石混入	土師器 カマドは西寄り→東寄り、 壁溝はカマド部分を除き一巡	
169	中の崎	SI113	方形	300×285 (10.0)	西壁の北寄り		確認できず		N−40−E	浮石混入	土師器　　煙道が長い 東壁際に壁溝あり	
170	中の崎	SI117	方形	730× (　)	不明		四隅		N−32−E		土師器	

第31表　竪穴住居跡観察表(17)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
171	中の崎	SI117´	方形	497× (　)	不明		四隅		N−31−E		土師器	
172	中の崎	SI301	方形	435×420 (19.5)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−29−E		土師器	
173	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI101	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器、須恵器 SI101´・SI110→SI101	
174	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI101´	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器 空堀に切られる SI101´・SI110→SI101	
175	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI102	方形	450×427 (19.8)	確認できず		不明				土師器・砥石	
176	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI103	方形	531× (　)	なし		不明				土師器・羽口 壁溝は西壁際にみられる SI103→SI105	
177	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI105	方形	397× (　)	なし		不明				土師器 壁溝は東西壁際にみられる SI103→SI105	
178	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI106	方形	408×370 (16.6)	南壁の西寄り とやや東寄り	粘土 川原石	不明		N−24−E		土師器 壁溝は各壁際に断続して	
179	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI107	方形	636×545 (34.0)	なし		不明				土師器	
180	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI108	方形	× (　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−88−W	浮石混入	土師器(鍋あり) 北壁際に壁溝あり C14測定　1210±80y BP	
181	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI109	方形	× (　)	なし						もう一棟重複するSI109´	
182	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI110	方形	410× (　)	なし						土師器	

第32表　竪穴住居跡観察表(18)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
183	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI121	方形	575×511 (33.7)	東壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−59−W	浮石混入	土師器、把手付土器 北側で重複する土坑は出入口か	平安後半
184	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI123	方形	380×345 (15.7)	なし		不明			地山土混入	土師器	
185	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI124	方形	344×250 (9.0)	なし		不明				土師器	
185	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI125	方形	355× (　)	確認できず		なし					
186	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI126	方形	455× (　)						浮石多量混入	土師器 SK134・SD013→SI126	平安後半 同時期か
187	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI127	方形	×395 (　)	北壁		不明				土師器・須恵器 床面が2段構造となる。重複の可能性あり	
188	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI129	方形	205× (　)	確認できず		確認できず				土師器	
189	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI131	方形	513× (　)	南壁の東寄り		四隅と				土師器	
190	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI131´	方形	× (　)							土師器	
191	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI132	方形	250×232 (5.05)	なし		不明				土師器	
192	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI133	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器	
193	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI137		× (　)							壁の一部が確認されたのみ	
194	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI138		× (　)							壁の一部が確認されたのみ	

第33表　竪穴住居跡観察表(19)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
195	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI002	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器	
196	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI003	方形	699×639 (40.0)	北側の西寄り		四隅とその中間			浮石混入	土師器、把手付土器、須恵器、 木器、炭化米 SI005・006→SI003→SI008 C14測定　970±75y BP	
197	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI005	方形	317× (　)	確認できず		四隅				SI005・006→SI003→SI008	
198	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI006	方形	320× (　)	確認できず		確認できず				SI005・006→SI003→SI008	
199	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI007	方形	440× (　)	東壁の北寄り		不明				土師器、須恵器 南壁際に壁溝あり SI007→SI008	
200	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI008	方形	667×595 (48.4)	北東壁の中央	粘土 川原石	四隅とその中間・対角線上	いずれも掘り込みが深い	N−47−E		土師器、把手付土器 SI007→SI008 壁溝はカマド部分を除き一巡	
201	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI009	方形	× (　)	東壁の北寄り		確認できず		N−68−W	浮石多量混入	土師器 SI009´→SI009	
202	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI009´	方形	440× (　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず		N−51−W		土師器、把手付土器 SI009´→SI009	
203	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI020	方形	457× (　)	東部に地床炉						土師器	
204	孫右ェ文館	SI001	方形	312×298 (9.97)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず		N−19−W		土師器 焼失家屋	平安後半
205	案内Ⅰ	SI007	方形	472×461 (22.74)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−4−E		土師器　煙道が長い 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
206	妻の神Ⅱ	SI001	方形	456×414 (19.781)	南東壁の南寄り	粘土 川原石	不明		N−21−W	堆積中に浮石層あり	土師器 SI002→SI001	平安前半

第34表　竪穴住居跡観察表(20)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
207	妻の神II	SI002	方形	614×612 (36.551)	南東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅と東西壁の中間		N−21−W	浮石多量混入	土師器　焼失家屋 SI025→SI002　煙道が長い 壁溝はカマド部分を除き一巡	
208	妻の神II	SI003	方形	353×350 (12.64)	南壁の西寄り	粘土 川原石	不明		N−21−W	浮石混入	土師器、鉄製品 焼失家屋 壁溝は北東隅の壁に沿って存在	平安後半
209	下乳牛	SI01	方形	850×780 (　)	南壁の西寄り				S−N	堆積中に浮石層あり	土師器、木製品(皿・櫛)、石帯 焼失家屋	平安前半
210	下乳牛	SI02	方形	420×400 (　)	北壁の中央 東壁の中央 南壁の西寄りに2基	粘土 川原石 土師器					土師器 焼失家屋 カマドAを意識し、床面を2段構造とする。カマド煙道はトンネル式	
211	案内IV	SI01	方形	430×350 (11.4)	南壁のほぼ中央		不明		N−13−E		土師器 焼失家屋の可能性あり	
212	案内IV	SI03	方形	560×560 (32.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−125−W	浮石をわずかに混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
213	案内IV	SI06	方形	320× (　)	確認できず		確認できず			堆積中に浮石層あり		
214	案内IV	SI09	方形	430×400 (17.3)	東壁の南寄り		不明		N−55−E	浮石をわずかに混入	土師器 カマドの煙道が長い	
215	案内V	SI02	方形	325×3.21 (12.69)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず		N−88−W	浮石混入		
216	案内V	SI03	方形	356×303 (10.79)	東壁の北寄り	粘土 川原石	不明		N−85−W		土師器　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡すると考えられる	

第35表　竪穴住居跡観察表(21)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
217	案内V	SI05	方形	250× (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	不明		N−87−E	浮石多量混入	土師器	
218	高屋館跡	SI03	方形	420×353 (　　)	南東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 19〜30×17〜41	N−113.5−E	浮石多量混入	土師器・須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡 白頭山火山灰が堆積	平安前半
219	鳥野遺跡	第1号	方形	350× (　　)	北壁のほぼ中央	粘土 川原石				浮石堆積層あり	土師器・紡錘車 煙道はトンネル式	奈良後半
220	源田平遺跡	第1号	方形	445×405 (　　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	東側壁際と床面に各2個	東側壁際ピット ×40〜60 床面ピット ×55〜60	N−35−E	浮石堆積層あり	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
221	源田平遺跡	第2号	方形	650×580 (　　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	東側壁際と床面に各2個	東側壁際ピット ×45〜 床面ピット ×55〜70	N−50−W	浮石堆積層あり	土師器・砥石・鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
222	小平遺跡	第4号	方形	410×400 (　　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認されなかった			浮石堆積層あり	土師器(墨書あり　元・日願・寺)	平安前半
223	堪忍沢遺跡	SI01	方形							浮石粒混入	土師器 壁溝が確認されている。	平安後半
224	堪忍沢遺跡	SI02	方形							浮石粒混入	土師器 壁溝が確認されている。	平安後半
223	堪忍沢遺跡	SI03	方形	350×370 (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認されなかった			浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
224	堪忍沢遺跡	SI04	方形	700× (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間			全層に浮石粒混入	土師器・須恵器・羽口・鉄製品 焼失家屋 壁溝は東・北壁際につくられる。 床面にL字の溝	平安後半

第36表　竪穴住居跡観察表(22)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
225	堪忍沢遺跡	SI05	方形	270× (　　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅			浮石粒混入	土師器	平安後半
226	堪忍沢遺跡	SI06	方形	470× (　　)	南東壁の東寄り	粘土 川原石	四隅			浮石粒混入	土師器・砥石・刀子 壁溝は東・北壁際にある	平安後半
227	御野遺跡		方形	350× (　　)	南東壁		対角線上				土師器・須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
228	神田遺跡		方形	330× (　　)	東壁						土師器(墨書あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
229	太田谷内館跡	SI01	方形	270×260 (7.00)	西壁やや南寄り	粘土 川原石	不明				SI02・07→SI01	平安末葉
230	太田谷内館跡	SI07	長方形	315×265 (8.3)			四隅とその中間も				土師器(把手付土器)、須恵器、 南壁・西壁際に壁溝 SI02・07→SI01、焼失家屋	平安末葉
231	太田谷内館跡	SI02	長方形	260×200 (5.2)	西壁	粘土 川原石	不明				SI02・07→SI01、SI17とは不明	平安末葉
232	太田谷内館跡	SI17					不明				土師器 SI02と重複	平安末葉
233	太田谷内館跡	SI12	方形	275×240 (6.6)	西壁の北寄り	粘土	四隅				土師器 SI11・45→SI12→SK14	平安末葉
234	太田谷内館跡	SI11	長方形	430×365 (15.7)			四隅とその中間				土師器、フイゴ羽口、鉄製品、 SI13・15→SI11→SI12→SK14	平安末葉
235	太田谷内館跡	SI13					不明				SI13・15→SI11→SI12	平安末葉
236	太田谷内館跡	SI45	長方形	260×200 (5.2)			四隅				須恵器、フイゴ羽口	平安末葉
237	太田谷内館跡	SI16					不明				SI16→SI11	平安末葉

第37表　竪穴住居跡観察表(23)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
238	太田谷内館跡	SI23	方形	640×625 (40.0)	東壁 (複数あり)	粘土 川原石	四隅、対角線上とその中間に数個	×70～90		浮石粒混入	遺跡の中で最も新しいものと予想 SI25・42→SI24→SI23 土師器、須恵器、フイゴ羽口、鉄製品	平安末葉
239	太田谷内館跡	SI24					四隅とその中間に数個				土師器 SI25・42→SI24→SI23	平安末葉
240	太田谷内館跡	SI25					不明				土師器 SI25・42→SI24→SI23	平安末葉
241	太田谷内館跡	SI42	方形	295×270 (8.0)			四隅				遺跡内で中でも古い段階のものと想定 SI25・42→SI24→SI23	平安末葉
242	太田谷内館跡	SI21					不明				SI20・52→SI21	平安末葉
243	太田谷内館跡	SI20					不明				須恵器、鉄製品 焼失家屋、SI20→SI21・52→44	平安末葉
244	太田谷内館跡	SI52	方形	300×280 (8.4)			不明				手捏ね土器 SI52→SI44	平安末葉
245	太田谷内館跡	SI44	長方形	440×320 (14.1)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅と南・西壁の中間				土師器、把手付土器、須恵器、鉄器 SI20→SI21・52→44→SI22	平安末葉
246	太田谷内館跡	SI22					不明				須恵器 SI20→SI21・52→44→SI22	平安末葉
247	太田谷内館跡	SI27	隅丸長方形	510×450 (23.0)			四隅	四隅 ×50～60			鉄器(鋤) 焼失家屋	平安末葉
248	太田谷内館跡	SI54					四隅とその中間	四隅 ×30～40				平安末葉
249	太田谷内館跡	SI132					四隅とその中間					平安末葉
250	太田谷内館跡	SI29	長方形	350×295 (10.3)	床面中央東寄り	粘土 川原石	不明				土師器、フイゴ羽口、鉄器 SI106→SI29	平安末葉

第38表　竪穴住居跡観察表(24)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
251	太田谷内館跡	SI70	方形	420×400 (18.4)	床面中央南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×60			土師器、 出入り口施設、SI78→SI70	平安末葉
252	太田谷内館跡	SI78	方形	470×460 (21.6)			四隅	四隅 ×60			土師器、鉄器 SI78→SI70	平安末葉
253	太田谷内館跡	SI85					不明				SI70・71と重複、新旧不明	平安末葉
254	太田谷内館跡	SI71					不明				SI71→SI33・70・75・78・85 焼失家屋	平安末葉
255	太田谷内館跡	SI33	方形	285×270 (13.4)			四隅とその中間				土師器、把手付土器 SI71→SI33→SI75	平安末葉
256	太田谷内館跡	SI75	長方形	6.00×535 (32.1)	床面の北西隅	粘土	四隅とその中間に数個				土師器 壁溝は南壁の東側を除きほぼ一巡 SI71・33・106・142→SI75	平安末葉
257	太田谷内館跡	SI106					不明				SI106→SI75・29・70	平安末葉
258	太田谷内館跡	SI107					四隅とその中間に数個				SI142・75と重複、新旧不明	平安末葉
259	太田谷内館跡	SI142			南壁		四隅とその中間に数個	×20～30				平安末葉
260	太田谷内館跡	SI144					四隅とその中間に数個					平安末葉
261	太田谷内館跡	SI74	長方形	490×430 (21.1)			四隅とその中間に数個	四隅 ×40～60			土師器、雁股鏃 SI74→SI107・142・144	平安末葉
262	太田谷内館跡	SI143					不明					平安末葉
263	太田谷内館跡	SI47	長方形	630×440 (27.7)	西壁のやや北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個	×40～70			土師器、フイゴ羽口、鉄器 煙道は長いタイプ	平安末葉

第39表　竪穴住居跡観察表(25)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
264	太田谷内館跡	SI40	長方形	360×430 (10.8)	南壁のやや北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個	四隅 ×30～50			土師器、砥石 SI145→SI40、煙道はトンネルタイプ	平安末葉
265	太田谷内館跡	SI145	長方形	260×230 (6.0)			四隅	四隅 ×30～35			SI145→SI40、	平安末葉
266	太田谷内館跡	SI91	長方形	600×510 (30.6)	東壁の北寄り		四隅とその中間	四隅 ×40～50			土師器、把手付土器、フイゴ羽口、鉄器 焼失家屋、壁溝がほぼ一巡 SI91→SI108	平安末葉
267	太田谷内館跡	SI108	長方形	650×580 (37.7)			四隅とその中間に数個	×30～60			土師器、把手付土器、鉄器 SI91→SI108	平安末葉
268	太田谷内館跡	SI121	方形	550×540 (29.7)	東壁		四隅とその中間に数個	×20～60			SI121→SI91→SI108	平安末葉
269	太田谷内館跡	SI79					不明				SI108→SI121・108	平安末葉
270	太田谷内館跡	SI60	長方形	530×450 (23.9)			四隅とその中間に数個				SI126→SI60→SI61	平安末葉
271	太田谷内館跡	SI126	長方形	630×500 (31.5)			四隅とその中間に数個	×25～40			東・西壁際に壁溝 SI126→SI60→SI61	平安末葉
272	太田谷内館跡	SI56	方形	400×390 (15.6)	東壁の北寄り	粘土	四隅とその中間	×15～30			土師器、鉄器 SI90→SI56→SI97	平安末葉
273	太田谷内館跡	SI90					四隅とその中間に数個				壁溝は連続しないが各壁際に存在 SI90・56→SI57	平安末葉
274	太田谷内館跡	SI57					不明				土師器 SI90・56→SI57	平安末葉
275	太田谷内館跡	SI97					四隅とその中間に数個	×20			SI90・56・60・126→SI97	平安末葉
276	太田谷内館跡	SI61	長方形	650×540 (35.1)	東壁の北寄り	粘土	各壁際に数個	×20～60			土師器、把手付土器、鉄器	平安末葉

第40表　竪穴住居跡観察表(26)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
277	太田谷内館跡	SI105	長方形	410×310 (12.7)			四隅とその中間					平安末葉
278	太田谷内館跡	SI137									SI137→SD100	平安末葉
279	太田谷内館跡	SI141									SI141→SD100	平安末葉
280	太田谷内館跡(2次)	SI150	方形	483×395 (19.0)	南壁の南西隅寄り	粘土	四隅と対角線上	四隅 ×10～19	N−20−E	浮石粒を多量混入	土師器、須恵器、鉄滓	平安後半
281	太田谷内館跡(2次)	SI151	方形	495×495 (20.0)	南壁の南西隅寄り	粘土 川原石	壁溝内にあるが特定できず		N−5−W	浮石粒を多量混入	土師器、フイゴ羽口、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
282	太田谷内館跡(2次)	SI152	隅丸方形	395×385 (　)	東壁の北東隅寄り	粘土 川原石	東壁際に2本、床面に2本	×35～52	N−80−E	浮石粒を多量混入	土師器、須恵器	平安後半
283	太田谷内館跡(2次)	SI157	方形	370×340 (14.0)	南壁の南西隅寄り	粘土 川原石	四隅と東・西壁際	四隅 ×16～20	S−15−E	浮石粒を多量混入	土師器、須恵器　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡 白頭山・苫小牧火山灰が堆積する	平安後半
284	太田谷内館跡(2次)	SI158	方形	214× (　)	南壁の南東隅寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×12～16	N−7−W	浮石粒を多量混入	土師器　焼失家屋 白頭山・苫小牧火山灰が堆積する	平安後半
285	柴内館跡	SI156a	方形	486×482 (　)	南壁の西側	粘土 川原石	四隅	四隅 ×12～57		浮石粒を多量混入	土師器、砥石、鉄製品　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI156b→SI156a	平安後半
286	柴内館跡	SI156b	方形	366× (　)	検出できず		四隅	四隅 ×　～47			土師器　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI156b→SI156a	平安後半
287	柴内館跡	SI157	方形	600×528 (　)	南壁の西側	粘土 川原石	四隅	四隅 ×　～48		浮石粒を多量混入	土師器、土玉 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
288	柴内館跡	SI158	方形	532×506 (　)	南壁の東側		四隅とその中間	×6～57		浮石粒を多量混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半

第41表　竪穴住居跡観察表(27)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
289	柴内館跡	SI450a	方形	933×930 (　)	南壁の西側		四隅とその中間	×6～72		浮石粒を多量混入	土師器、須恵器、鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI450b→SI450a(SI450bを改築) 住居外南側に付属する掘立柱建物跡	平安後半
290	柴内館跡	SI450b	方形	933×930 (　)	南壁の東側		四隅とその中間	×6～72			土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI450b→SI450a(SI450bを改築)	平安後半
291	柴内館跡	SI807	方形	662× (　)	南壁の西側		四隅	×12～64		浮石粒を多量混入	土師器、砥石、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
292	柴内館跡	SI851	方形	460× (　)			特定できず				土師器、砥石、鉄製品	平安後半
293	柴内館跡	SI1029a	方形	× (　)						浮石粒を多量混入	土師器、砥石 SI1029b→SI1029a	平安後半
294	柴内館跡	SI1029b	方形	278× (　)						浮石粒を多量混入	SI1029b→SI1029a	平安後半
295	柴内館跡	SI1200	方形	740×704 (　)	南壁の西側	粘土 川原石	四隅とその中間	×30～68		浮石粒を多量混入	土師器、鉄製品(穂摘み具)、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
296	柴内館跡	SI1264	長方形	434×340 (　)			特定できず	×2～35		浮石粒混入	土師器、須恵器、鉄滓 SI1265→SI1264	平安後半
297	柴内館跡	SI1265	方形	483× (　)							土師器、鉄滓 SI1265→SI1264 壁溝は壁際を一巡か	平安後半
298	柴内館跡	SI1269b	方形	440×405 (　)	南壁の西側		特定できず	×9～41		浮石粒を多量混入	土師器、竈壁の破片、鉄滓 SI1269b→SI1269a(中世)	平安後半
299	柴内館跡	SI1623	方形	225×215 (　)	南東壁のやや南西寄り					浮石層が堆積	土師器、陶磁器	平安後半

第42表　竪穴住居跡観察表(28)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
300	物見坂III	SI303	方形	560×560 (　　)	南壁の南東寄り	粘土 川原石	特定できず			浮石粒混入	土師器(鍋あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
301	物見坂III	SI310	方形	270× (　　)						浮石粒混入		平安後半
302	御休堂	SI01	方形	362×360 (12.44)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×8 ～16	N−6−W		土師器 カマド煙道が長いタイプ	
303	御休堂	SI03	方形	397×359 (14.52)	南壁の東寄り	粘土	特定できず		N−87−E	浮石粒混入	土師器、鉄製品	
304	御休堂	SI04	方形	788×701 (51.40)			壁際に数本か		N−24−E	浮石粒混入	砥石	
305	天戸森	ST01	方形	365×320 (8.20)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−0−E (N−S)	浮石層が堆積する	土師器	
306	天戸森	ST02	方形	360×350 (10.8)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×13 ～20	N−0−E (N−S)	浮石粒混入	土師器	
307	天戸森	ST03	方形	420×416 (16.5)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×14～23	N−13−E	浮石粒を多量混入	土師器 カマドが構築される壁際を除き壁溝が作られる	
308	高市向館跡	SI01	方形	627×524 (23.9)	東壁の中央	粘土 川原石	四隅	四隅 ×21～35	N−67−E		カマド部分を除き壁溝が一巡	平安後半
309	高市向館跡	SI02	方形	502×390 (19.6)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×25～35	N−4−E		土師器 SI05→SI04→SI02	平安後半
310	高市向館跡	SI03	方形	253×250 (6.3)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に1～3個	四隅 ×44～50	N−5−W	浮石粒混入	土師器 カマド部分を除き壁溝が一巡	平安後半
311	高市向館跡	SI04	方形	574×504 (28.9)	北東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に2～3個	四隅 ×11～28	N−61−E		土師器 SI05→SI04→SI02	平安後半
312	高市向館跡	SI05	方形	602×544 (32.7)	東壁の北寄り	粘土	四隅とその中間に2～3個	四隅 ×23～65	N−24−E		土師器 SI06→SI04	平安後半

第43表　竪穴住居跡観察表(29)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
313	高市向館跡	SI06	方形	478×466 (22.3)	東壁の北寄り		四隅とその中間に3～4個	四隅 ×27～43	N−4−E			平安後半
314	高市向館跡	SI09	方形	508×464 (23.6)	南壁のやや東寄り		四隅と東西壁の中程	四隅 ×26～59	N−2−W		カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡 SI09→ST01・13(中世)	平安後半
315	高市向館跡	SI10	方形	600×568 (34.1)	東壁の南寄り		四隅とその中間に数個	四隅 ×30～54	N−87−W		土師器(把手付土器) SK03→SI10→ST21→ST07	平安後半
316	高市向館跡	SI12	方形	520×513 (26.7)	南東壁の南寄り		四隅と対角線上か	四隅 ×26～33	N−50−W		土師器 カマド部分を除き壁溝が一巡 南東壁の東側にスロープ上の出入口	平安前半
317	高市向館跡	SI13	方形	370×350 (13.0)	南壁のほぼ中央	粘土 川原石	特定できず		N−5−W			平安後半
318	高市向館跡	SI14	方形	936×824 (77.1)	北東壁のやや北寄り		四隅と対角線上	四隅 ×27～71	N−26−W		土師器。小刀 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡 床面の溝から2時期が想定される ST20→SI14→ST16	平安後半
319	高市向館跡	SI15	方形	788×760 (59.9)	北東壁のやや北寄り		四隅と対角線上	四隅 ×32～72	N−40−W		紡錘車、火箸 焼失家屋 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡	平安後半
320	高市向館跡	SI16	方形	527×506 (26.7)	南東壁の西寄り				N−22−W			平安後半
321	高市向館跡	SI17	方形	860×781 (67.2)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅 ×29～65 対角線上 ×52～65	N−11−W		土師器、砥石、小刀 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡	平安後半
322	高市向館跡	SI18	方形	588×557 (32.8)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×6～31	N−88−W		土師器 東壁にスロープ状の出入口	平安後半
323	高市向館跡	SI19	方形	456×360 (16.4)	南西壁の西寄り				N−70−E		須恵器	平安後半

第44表　竪穴住居跡観察表(30)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
324	高市向館跡	SI21	方形	423×360 (15.2)	東壁の北寄り				N−83−E		土師器、須恵器、砥石、紡錘車、小刀 SI21→ST11・12→SD01	平安前半
325	高市向館跡	SI22	方形	516×501 (25.9)	南西壁の西寄り		四隅とその中間に3個	四隅 ×32〜46	N−23−E		SI22→SD03	平安後半
326	高市向館跡	SI23	方形	593×573 (34.0)	東壁の北寄り		四隅とその中間に3個	四隅 ×42〜63	N−77−E		土師器、鉄器 SI28→SI23	平安後半
327	高市向館跡	SI24	方形	418×418 (17.5)	南東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×23〜73	N−24−W		土師器	平安後半
328	高市向館跡	SI25	方形	503×496 (24.9)	南壁の西寄り		特定できず		N−16−W		土師器 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡	平安後半
329	高市向館跡	SI26	方形	500×486 (24.3)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×30〜50	N−101−W		土師器(木葉痕あり)	平安後半
330	高市向館跡	SI27	方形	506×504 (25.1)	南東壁の南寄り		特定できず		N−45−W		土師器(砂底あり)、鉄製品	平安後半
331	高市向館跡	SI28	方形	573×545 (31.2)	南壁の西寄り		四隅と対角線上	四隅 ×39〜58	N−26−W	浮石多量混入	土師器 北・西壁際に沿って壁溝あり SI28→SI23	平安後半
332	高市向館跡	SI29	方形	268×266 (7.1)	東壁の北寄り	粘土 川原石			N−78−E	浮石混入		平安後半
333	高市向館跡	SI30	方形	430×392 (16.9)	南壁の西寄り		四隅とその中間	四隅 ×58〜73	N−4−E		土師器	平安後半
334	高市向館跡	SI31	方形	300×260 (7.8)	南東壁に2基	粘土 川原石			N−46−W	浮石の堆積層あり	土師器、須恵器 カマドから2時期を想定(A→B) 煙道は長く、川原石で構築される	平安前半
335	下沢田	SI01	長方形	438×270 (11.78)	南壁の東側	粘土 川原石	特定できず		N−12−W	浮石混入	土師器、鉄製品	平安後半
336	下沢田	SI02	方形	414×312 (13.5)	東壁の北寄り	粘土 川原石	特定できず		N−77−W	浮石混入	土師器	平安後半

第45表　竪穴住居跡観察表(31)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
337	下沢田	SI03 A～C	方形	724×600 (41.8)	南東隅の床面	粘土 川原石	四隅とその中間に1～2個	四隅 ×28～54	N−15−W	浮石混入	土師器、紡錘車、刀子 重複・拡張を行う。 SI03C→SI03B→SI03A	平安後半
338	下沢田	SI04	方形	380×325 (9.95)	住居中央より東寄り床面	川原石	南北壁際の中央に1個		N−17−W	浮石混入	土師器(把手付土器)、穂摘み具 カマドは石組による	平安後半
339	下沢田	SI06	方形	342×320 (9.14)	西壁の北寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線 ×10～29	N−120−E	浮石混入	土師器	平安後半
340	下沢田	SI07	方形	762×740 (56.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×55～85	N−23−E	浮石混入	土師器(把手付土器)、紡錘車 壁溝はカマド部分を除き一巡 2時期の可能性がある	平安後半
341	下沢田	SI08	方形	398×314 (11.56)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅か	四隅 ×33～46	N−16−E	浮石混入	土師器(支脚) SI10→SI08	平安後半
342	下沢田	SI09	方形	426×342 (13.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石	南・北壁際に沿って相対する8個	×10～18	N−10−E	浮石混入	土師器(把手付土器)、 SI11→SI09	平安後半
343	下沢田	SI10	方形	306×304 (9.02)	南壁の西寄り	粘土 川原石	特定できず		N−8−E		西壁際に壁溝 SI10→SI08	平安後半
344	下沢田	SI11	方形	562× (　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線 ×67～78	N−88−W	浮石混入	土師器(把手付土器)、 SI11→SI09	平安後半
345	地羅野館跡	SI03	方形	680× (　)			対角線上	対角線 50～55×63～77			須恵器、土師器(把手付土器)、鉄製品 壁溝は一巡か SI07→SI03	平安後半
346	地羅野館跡	SI07	方形	750×720 (　)	南壁の西寄り		四隅と対角線上か	四隅 ×60			土師器、 壁溝はカマド部分を除き一巡 南壁に張出施設を持つ	平安後半
347	用野目川向Ⅲ	SI01	方形	642×630 (　)	確認できなかった		四隅とその中間に3個	四隅 ×31～45		浮石混入	土師器、須恵器、鉄滓　焼失家屋 SK07・14→SI01→SI02・ST03	平安後半

第46表　竪穴住居跡観察表(32)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
348	用野目川向III	SI02	方形	498×494 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 50×42～57	N－9－E	浮石多量混入	土師器、須恵器、フイゴ羽口　焼失家屋 SK07・14→SI01→SI02・ST03	平安後半
349	用野目川向III	SI03	方形	228×180 (　)	確認できず		特定できず			浮石多量混入	土師器、須恵器 SI01・02→SI03→SK08	平安後半
350	用野目川向III	SI06	方形	800× (　)			四隅とその中間に数個	四隅 ×27～28		浮石混入	焼失家屋 土師器、須恵器	平安後半
351	小枝指館跡	SI101	方形				特定できず			浮石多量混入	土師器、須恵器 焼失家屋	平安前半
352	小枝指館跡	SI102	方形	550× (19.8)	北壁の中央	粘土 川原石	対角線上	対角線 ×	N－14－W	浮石混入	土師器(丸底の坏)、紡錘車 焼失家屋、SI102→SI104→SI103	奈良
353	小枝指館跡	SI103	方形	440× (16.7)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に1個	四隅 13～25×5～10	N－106－E	浮石混入	土師器(丸底の坏) SI102→SI104→SI103	奈良
354	小枝指館跡	SI104	方形	× (　)	南壁の東寄り		四隅	四隅 14～25×16～53	N－29－W		SI104→SI103	奈良
355	赤坂B	SI02	方形	502×488 (20.3)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N－11－W	浮石多量混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 東壁から住居中央まで溝が造られる	平安後半
356	赤坂B	SI03	方形	340×328 (9.60)	南壁の西寄り		確認できなかった		N－1－W	浮石多量混入		平安後半
357	赤坂B	SI04	方形	440×427 (15.8)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N－S	浮石多量混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 北壁に平行して2条の溝	平安後半
358	赤坂B	SI05	方形	548× (　)						浮石混入	土師器 壁溝はほぼ一巡か	平安後半
359	赤坂B	SI06	方形	364×356 (12.1)	東壁の北寄り	粘土 川原石	住居外	15～25×19～23	N－100－W	浮石混入	土師器 焼失家屋、煙道が長い	平安後半

第47表　竪穴住居跡観察表(33)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
360	赤坂B	SI07A	方形	720× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個、対角線上			浮石混入	土師器、須恵器、フイゴ羽口 カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI07D→SI07C→SI07B→SI07A	
361	赤坂B	SI07B	方形	720× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個、対角線上			浮石混入	カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
362	赤坂B	SI07C	方形	610× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個			浮石混入	カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
363	赤坂B	SI07D	方形	600× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石					カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
364	赤坂B	SI08	方形	525×523 (25.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線上 25～30×39～58	N－6－E	浮石混入	土師器(把手付土器)、砥石	平安後半
365	赤坂B	SI09	方形	390×305 (10.9)	南壁の西寄り	粘土 川原石	住居外の対角線上とその中間	対角線上 22～30×20～30	N－5－E	浮石混入	土師器、砥石	平安後半
366	赤坂B	SI10	方形	430× (　)			四隅	四隅 20×6				平安後半
367	赤坂B	SI11	方形	280×275 (6.40)	南壁のやや東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N－18－W		土師器	平安後半
368	赤坂B	SI12	方形	492×454 (17.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 25～30×16～20	N－5－W	浮石混入	土師器、紡錘車 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
369	赤坂B	SI13	方形	383×362 (12.8)	南壁の西寄り		確認できなかった		N－3－W	浮石混入	土師器、煉瓦(セン)	平安後半

第48表　竪穴住居跡観察表(34)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
370	赤坂B	SI14	方形	456× (　)			四隅とその中間	四隅 20～30×13～60		浮石混入	土師器 拡張されている。SI15→SI14 壁溝は壁際を一周か	平安後半
371	赤坂B	SI15	方形	590×510 (27.4)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できなかった			浮石混入	土師器 SI15→SI14	平安後半
372	赤坂B	SI105	方形	413× (　)	南西側の床面	粘土 川原石	確認できなかった			浮石混入	土師器	平安後半
373	花輪古館 B区	SI101	方形	420× (　)	南壁のほぼ中央		確認できなかった		N−11−E	浮石多量混入	壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
374	花輪古館 C区	SI301	方形	626×550 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線 35前後×30前後	N−15−W	浮石多量混入	土師器、須恵器	平安後半
375	赤坂A(1次)	SI01 A・B	方形	600×545 (29.43)	南壁の中央よりやや西寄り	粘土 川原石	四隅		N−8−W		土師器、鉄滓 カマド部分を除き断続的に一巡 東側に張り出し施設	平安後半
376	赤坂A(1次)	SI02	方形	396× (　)			確認できなかった				土師器、砥石 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
377	赤坂A(1次)	SI04	方形	492×384 (17.0)	東壁の北側	粘土 川原石	四隅		N−94−W	上層に浮石多量混入	土師器、須恵器、小刀、鉄滓 SK39→SK50=SI04→SI05 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
378	赤坂A(1次)	SI05	方形	675× (　)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−10−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡 SK39→SK50=SI04→SI05	平安後半
379	赤坂A(1次)	SI06	方形	527× (　)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石			N−16−E	浮石混入	土師器	平安後半
380	赤坂A(1次)	SI07	方形	397×360 (12.86)	南壁の中央やや東寄り	粘土 川原石	四隅		N−2−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、石製品、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI08→SI07	平安後半

第49表　竪穴住居跡観察表(35)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
381	赤坂A(1次) (2次)	SI08	方形	397×320 (　　)	南壁	粘土 川原石			N−1−E		土師器、フイゴ羽口 SI08→SI07	平安後半
382	赤坂A(1次)	SI09	方形	294×286 (7.57)	南西部床面に焼土				N−9−W	浮石混入	土師器、鉄製品	平安後半
383	赤坂A(1次)	SI10	方形	610×518 (28.44)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−6−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、鉄滓 大湯浮石層を掘り込む SK79→SI10=SK76・77→SI15	平安後半
384	赤坂A(1次)	SI12	方形	602×582 (31.53)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−14−E		土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓 大湯浮石層を掘り込む 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
385	赤坂A(1次)	SI15	方形	381× (　　)	西壁の北寄り	粘土 川原石	四隅		N−86−E		土師器 大湯浮石層を掘り込む SK79→SI10=SK76・77→SI15	
386	赤坂A(2次)	SI101	方形	640× (　　)	南壁の東側	粘土 川原石	配置特定できず		N−36−W		土師器、鉄滓	
387	赤坂A(2次)	SI102	方形	593× (　　)	南壁の西寄り 南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個		N−17−W	浮石混入	土師器、須恵器、鉄滓 カマドA→B 壁溝はカマド部分を除き一巡	
388	赤坂A(2次)	SI103	方形	260× (6.08)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−15−E	浮石混入	土師器	
389	赤坂A(2次)	SI104	方形	310×288 (8.03)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−10−E		土師器、鉄製品、鉄滓	
390	新斗米館跡 (II次)	SI01	方形	340×260 (8.03)	東壁の南寄り	粘土 川原石	特定できず		N−71−E		土師器	
391	物見坂III	SI02	方形	392×358 (　　)	西壁のほぼ中央	粘土 川原石	対角線上				土師器(丸底の坏) 焼失家屋。煙道が長い。	奈良
392	物見坂II	SI03	方形	372×360 (　　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	壁中にあるが特定できず			大湯浮石層が堆積	土師器	平安前半 浮石直前

第50表　竪穴住居跡観察表(36)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
393	菩提野	1号									凹地として確認	
394	菩提野	2号									凹地として確認	
395	菩提野	3号									凹地として確認	
396	菩提野	4号									踏査したが調査時発見できず	
397	菩提野	5号									凹地として確認	
398	菩提野	6号									凹地として確認	
399	菩提野	7号									踏査したが調査時発見できず	
400	菩提野	8号									踏査したが調査時発見できず	
401	菩提野	9号	方形	720× (　　)	南壁のやや西寄り	川原石	柱基石				土師器、鉄器 焼失家屋	奈良
402	菩提野	10号									踏査したが調査時発見できず	
403	菩提野	11号									踏査したが調査時発見できず	
404	菩提野	12号									踏査したが調査時発見できず	
405	大湯周辺分布	N6遺構	方形							浮石多量混入	土師器、須恵器、フイゴ羽口	平安前半
406	大湯周辺分布	OUN28	方形								土師器、鉄製品	平安前半
407	大湯4次 (D1区)	SI201	方形	519×509 (25.00)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に2個	四隅 ×26～48	N−24−W	浮石混入	土師器(砂底あり)、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
408	大湯4次 (D1区) 大湯13次 (F4区)	SI202 SI09	方形	453× (　　)			四隅とその中間	四隅		浮石混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	平安後半
409	大湯4次 (D1区) 大湯10次 (D3区)	SI203 SI304		× (　　)						浮石混入	土師器 壁溝は一部	平安後半

第51表　竪穴住居跡観察表(37)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
410	大湯4次 (F1区)	SI401	方形	337×300 (8.01)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−70−W	浮石混入	土師器 焼失家屋。煙道が長い	平安後半
411	大湯6次 (F1区)	SI402	方形	400×361 (12.9)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×8〜19	N−21−W	浮石混入	土師器、木製品 焼失家屋。	平安後半
412	大湯6次 (F1区) 大湯4次 (F1区)	SI404 SI03	方形	680×670 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 33〜35×17〜39	N−5−W	浮石混入	土師器、鉄製品、鉄滓 焼失家屋	平安後半
413	大湯6次 (F1区)	SI409		× (　)						浮石混入	土師器 焼失家屋、壁溝は一部	平安後半
414	大湯10次 (D3区)	SI301	方形	420× (　)						浮石混入	土師器	平安後半
415	大湯10次 (D3区)	SI302	方形	270× (　)						浮石混入		
416	大湯10次 (D3区)	SI303	方形	500×400 (　)			床面に1個		N−33−W	浮石多量混入	東壁・北壁に壁溝 SI304→SI303	
417	大湯13次 (F4区)	SI01	方形	425×345 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	南北壁の延長線上		N−S		土師器、セン 焼失家屋	平安前半
418	大湯13次 (F4区)	SI02	方形	×268 (　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できず		N−33−W	床面に浮石層	土師器、セン	平安前半
419	大湯13次 (F4区)	SI04	方形	432×356 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 28前後×	N−12−W	床面に浮石層	土師器	平安前半
420	大湯13次 (F4区)	SI05	方形	460×430 (　)	北壁の東寄り	粘土 川原石			N−13−W	床面に浮石層	土師器、フイゴ羽口	平安前半
421	大湯13次 (F4区)	SI06	方形	470×390 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石 セン			N−15−W	壁溝内に浮石	土師器 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半

第52表　竪穴住居跡観察表(38)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
422	大湯13次 (F4区)	SI07	方形	×720 (　)	南壁の西寄り 南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−25−W	浮石多量混入	土師器、須恵器鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡	
423	大湯13次 (F4区)	SI08	方形	430×410 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	床面に1個		N−15−W	浮石多量混入	壁溝はカマド部分を除き一巡	
424	大湯13次 (F4区)	SI10	方形	520×500 (　)	南壁の西寄り 南壁の東寄り	粘土 川原石			S−21−W		未調査で平面プランのみ確認	
425	大湯13次 (F4区)	SI11	方形	540×510 (　)	南壁の東寄り				S−30−W			
426	大湯13次 (F4区)	SI12	方形	540×510 (　)	南壁の東寄り				S−33−W			
427	大湯19次 (D9区)	SI10	方形		南壁					浮石混入	土師器	平安後半
428	大湯19次 (D9区)	SI11	方形		南壁の東寄り						土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	
429	大湯19次 (D9区)	SI12									壁溝が存在	
430	大湯19次 (D9区)	SI13								浮石層を切る		平安後半
431	大湯19次 (D9区)	SI14								浮石層を切る		平安後半
432	玉内	SI118	方形	380×375 (　)			確認されず				北壁際に確認できる程度 SI118→SI116→SI112→SI110	
433	玉内	SI116	略方形	320以上×320 (　)							焼失家屋 西壁際に壁溝に一部を確認	
434	玉内	SI112		310× (　)							土師器	
435	玉内	SI110	略方形	400×365 (　)	東壁の北寄り 東壁の南寄り	粘土 川原石					土師器、鉄製品、鉄塊 東壁を除く壁際に壁溝	

第53表　竪穴住居跡観察表(39)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
436	玉内	SI117	方形	280～290×(　　)	東壁の北寄り	粘土				大湯浮石層を切る	土師器	平安後半
437	鹿角沢Ⅱ	SI01	方形	490×470	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず			大湯浮石が堆積		平安前半
438	鹿角沢Ⅱ	SI02	方形	680×670	北壁中央	粘土 川原石	対面線上の床面			大湯浮石が堆積	土師器高坏２点	奈良
439	鹿角沢Ⅱ	SI03	方形		西壁	粘土	確認できず					奈良
440	鹿角沢Ⅱ	SI04	方形									
441	鹿角沢Ⅱ	SI05	方形	360×350	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず				ガラス玉１点	平安前半
442	鹿角沢Ⅱ	SI06	方形									
443	鹿角沢Ⅱ	SI07	方形	690×(　　)	東壁の南寄り	粘土	四隅					平安前半